

338

202

6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6

始





25 814

25 731

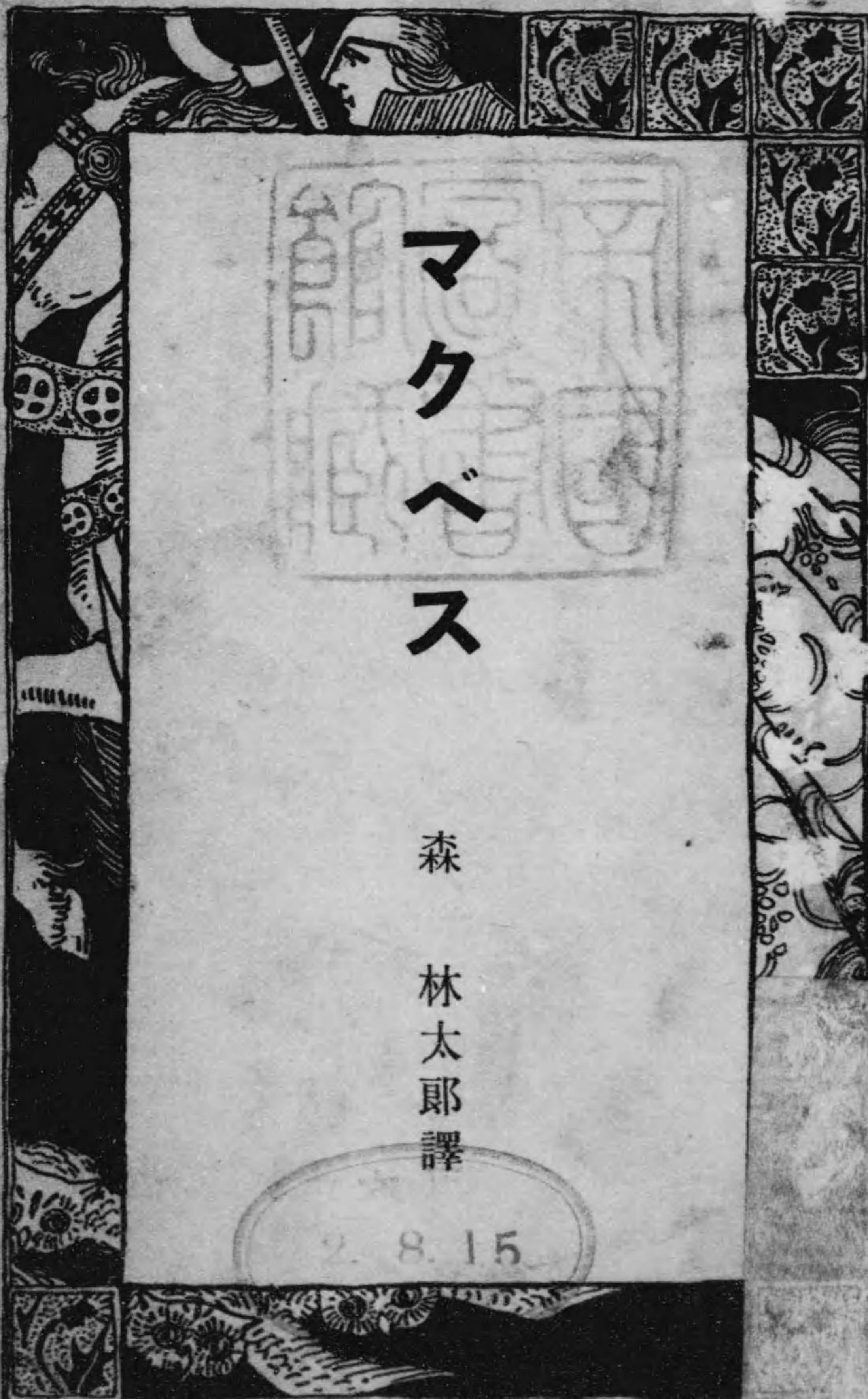


7-2252

338-202

338-202

5



マクベス

シェイクスピア

森 林太郎 譯



## 序

譯者森博士は、此譯に筆を著けられる前に、人を以て私へ申しこされた。こんど近代劇協會の當事者から、切に「マクベス」を譯してくれと頼まれたが、シェークスピア物は、今のごころ君の受持のやうになつてゐるから、君の快諾を得てからでないご、詰らん誤解をされても面白くない。で、若し異議がないなら序文を書いてくれ、といふ傳言があつた。私は即座に承諾の旨を答へておいた。

それはつひ此間のやうに思つてゐるご、もう大抵出來たといふ、これも人傳手の便りが聞えて、今月の末になり、譯文全部が近代



劇協會から、私の手許へ廻つて來た。

四

「マクベス」は沙翁の作中で比較的最も短い作の一つではあるが、其脱稿の例の如く神速なのに、先づ少からず驚かされた。本文を閱讀するに及んで、更に驚いたのは、原文が殆ど全く逐語譯に、英文を其儘に譯出されてゐることであつた、一行々々の割振までも原文其儘であるといつてよい位である。次に最も注意すべきは、随分いろ／＼な異注があつて解するに荷厄介な沙翁作中に在つて、決して面倒の少いほうとはいはれない此作が、如何にも平易に、如何にも流暢に、牽強な比喻も、耳遠い典故も、込入つた言ひ廻しも、殆ど日常の俗談平話のやうに樂々と譯されてゐること

いふことである。もう一つは、紛々然たる異釋の中から、殆ど毎に的確に、最妥當な注釋が拮據されてゐることである。本書は甚だ險阻な山路なのだが、歩く當人の足附を見てゐること、まるで平地のやうに見えることも評すべき譯し振である。沙翁の作が、これほど樂に暢氣らしく譯された例があるであらうか。

舞臺に於ける沙翁劇の演出法も次第に變遷して、或は寫實的ともなり、散文的ともなり、現代的ともなり、或は新しい象徴的ともなりつゝある今日は、其譯文の調子にも全く新しい用意の必要であることは明かである。森博士の此譯は、我舞臺上の沙翁劇に一新彩を加へる縁となるに相違ない。近代劇協會の諸子は、果し

五



て如何いふ工夫を凝して、此新譯に副はうとするであらうか。世の好劇家は、定めし深い興味を以て、此秋の演出を期待するところであらう。

大正二年五月下旬

# 坪内雄藏



## 第一幕

第一場 開豁なる原野

雷電。 魔女三人登場。

### 第一の魔女

今度はいつ逢ふことにしようかねえ。

神鳴、稻妻、雨の中で。

### 第二の魔女

どうせごたばたが濟んでからだね。

軍の勝負が附いてからだね。

マクベス





第一幕

第三の魔女

それは日の入<sup>いり</sup>までは掛からないわ。

第一の魔女

場所はどこ。

第二の魔女

草原さ。

第三の魔女

そこでマクベスを待ち受けるのさ。

第一の魔女

お黒さん。わたし往つてよ。

廿四

蠅<sup>が</sup>墓<sup>が</sup>が呼んでゐるわ。すぐ往つてよ。



綺麗<sup>けい</sup>とはきたない事で、きたないとは綺麗<sup>けい</sup>な事さ。

霧<sup>け</sup>やきたない烟<sup>け</sup>の中を飛んで行かうね。(魔女等消え失す。)

第二場 フォレス附近の露营地。

奥に鼓角の聲。ダンカン王、マルコム、ドナルベン、レノックス並に従者等登場。負傷せる兵卒に逢ふ。

ダンカン

なんと云ふ血だらけな男だ。あの様子では

戦闘の最近の状況を

聞くことが出来さうだな。

マクベス



マルコム

あれはわたしの擒になる所を、

善良な、大膽な軍人の持前で、

救つてくれた下士官でございます。どうだな戦友。

お前が戦場を離れた時の軍の模様を

陛下に申し上げてくれ。

兵卒

まだごつち附かずでありました。

まあ、草臥れた泳手が二人引つ組んでゐるやうで、

雙方手が出せません。あの殘忍極まるマクドンワルドですがな。

(根が謀叛人には持つて來いの奴で、義理も情も知らない、

種々雑多のあふれ者が周圍まはりにうよくしてをりますからな。)

あいつの方へ西の嶋から來て、

カアンやガロオグラスの荒武者共が尻押をいたします。

それに幸運の女神はあの咀はれた争に色目を使つて、

謀叛人の色のやうになりました。でもさうは行きませぬ。

こつちには勇士マクベスがをられます。勇士と云ふ名は嘘ではない。

あれは武勇の申子まをしこですから、

幸運の女神なんぞに構はずに、

血だらけで湯氣の立つ刀を振つて、

癖者の鼻の先まで切り込んで行つて、

握手あくしゅもせず、「さやうなら」とも云はずに、

腮から臍まで一刀に割つて、

首を身方の胸壁の上にお梟なされました。



タンカン

おう。勇ましい身内だ。天晴な侍だ。

兵卒

所が丁度日が差し始める處から、

舟を沈める暴風が吹いたり、恐ろしい神鳴が鳴つたりし出すやうに、

幸運が涌き出すと見えた泉から、

否運ひえんが溢れて來ます。お聞下さい、陛下。

たつた今正義が、武勇の力を籍りて、

逃足の早いカアン等を逐ひ拂つたと思ふと、

ノルエイの國王が、機會を窺つて、

研ぎ澄ました刃物と新手の兵とで、

改めて打つて掛かりました。

タンカン

して身方の隊長共は、

あのマクベスやバンコオは、それにびくともせなんだか。

兵卒

どういたしました

雀には鷺、兎には獅子は懼れませぬ。

實況を申し上げる事になると、かう申す外ござりませぬ。

丁度大砲に倍の藥を籠めたやうに、

あの方々は倍の倍も劇しく敵に打つて掛かられました。

湯氣の立つ血で湯を使はうと思召したか、

それとも新しいゴルゴタの爲置場開しおきはひらきをしようと思召したか、

そこの所は分かりませぬ。それはさうとわたくしは



もう疲れ切つてをります。創をどうにかいたして貰ひませんかでは。

ダンカン

うん。そちが詞もそちが創も、人柄に似合つてゐるぞ。

どれも名譽の味がする。こりや。軍醫を呼びに往つて遣れ。

(兵卒に人附きて退場。)

(ロス登場。)

あそこを來るのは誰か。

マルコム

ロス侯でございます。

レノツクス

や。なんと云ふ慌ただしい目附であらう。

何か變つた事を申しに參つたと見えます。

ロス

陛下の御機嫌を伺ひます。

ダンカン

侯はごこから來られた。

ロス

ファイフから參りました。

あのノルエイの旗が空に翻つて、身方の兵の

膽を冷すやうにあふいでゐる所から參りました。

ノルエイ奴、優勢な兵力を恃んで、

あの怪しからん賣國奴コオドル侯の援を得て、

猛烈な戦闘を開きました。

所がこちらからは軍の女神ベルロナの婿殿がひし〜とよろうて出て、

マクベス



劣らぬ兵力で立ち向つて、  
劔戦相交はり鋒鉞相接すると見るうちに、  
敵の暴威を挫きました。詰まり  
勝利は身方に歸しました。

ダンカン

おう。爲合な事であつた。

ロス

そこで

ノルエイ王スエノは和議を申し込みました。  
併しこちらでは、先方が聖コルムの小島で  
國庫へ番ドル拂ひ込むまでは、  
向うの戦死者の葬式をさせぬことにいたしました。



ダンカン

いや。コオドル候にも此上騙されてはゐぬ。  
往つてすぐに死刑に處するやうにいたせ。  
そしてマクベスに好く傳へてくれ。

ロス

すぐに參つて取り計ひませう。

ダンカン

コオドル候の失つた領地は、マクベスに遣さう。(一同退場)

第三場 草原。

雷鳴。 魔女三人登場。

マクベス





第一の魔女

お前どこにゐたの。

第二の魔女

豚を殺して来てよ。

第三の魔女

お前は。

第一の魔女

船頭の上さんがゐてね、前掛に栗を入れて

にちや／＼噬んでゐたのさ。「わたしにもおくれな」と云ふと、

「出ないよ、魔女奴」と太つちよがぬかしたのさ。

所がそいつの亭主は虎丸の船長で、アレツボへ船を出すのさ。



わたし篩に乗つて、

尻尾のない鼠のやうになつて附いて行つて、

遣つ附けるわ、遣つ附けるわ、遣つ附けるわ。

第二の魔女

わたしお前に風を遣るわ。

第一の魔女

御親切様。

第三の魔女

わたしも一つ風を遣るわ。

第一の魔女

その外の風は皆わたしが持つてゐるわ。

そいつの吹いてゐる港はどこでも







第一幕

船頭の地圖に書いてある。

そいつの知つてゐる方角はどこでも、わたし附いて行くわ。

そして亭主奴を秣のやうに干し上げて遣るわ。

きやつの上臈うはまぶたが、夜だつて晝だつて、

らくにたるむことはないやうにするわ。

立つ瀬のない日を送らせるわ。

九九八十一週間の苦しい月日の間、

惱まして瘦せ細らせて遣るわ。

きやつきやつの船は沈ませはしないが、

いつも暴風あらしに揉ませて遣るわ。

ちよいとわたしの持つてゐる物を御覽。

第二の魔女

お見せ、お見せ。

第一の魔女

これは或る船頭のおぢい拇ゆびさ。

歸途かへりみちに難船したの。

(奥にて鼓鳴る。)

第三の魔女

太鼓だわ、太鼓だわ。

マクベスが来るわ。

一同

わたし達運命の魔女は、手に手を取つて、

地の上を、海の上を、

ぐる／＼廻つて飛んで行く。

マクベス



お前が三度にわたしが三度で、  
三三が九度だよ。

お待よ。魔法はもう出来た。

(マクベス、バンコオ登場。)

マクベス

こんな悪いやうな好いやうな天気は、己はつひぞ見たことがない。

バンコオ

フオレスまでまだどの位あるだらう。あいつ等はなんだらう。

ひどく萎びて、凄まじい形なりをしてゐるなあ。

どうも此世界のものではなささうで、

その癖そこらに立つてゐる。(魔女等に)こら。お前達は生きてゐるのか。  
物を問ふことの出来るやうなものなのか。己の話が分かるやうだな。

手ん手にざら附いた指を萎びた唇に當てるぢやないか。

お前達は女だと見える。

併しその髭を見ると、

さうとも言ひ兼ねるが。

マクベス

物が言へるなら言はぬか。お前達はなんだ。

第一の魔女

マクベス様、御機嫌好う。グラミスの殿様、御機嫌好う。

第二の魔女

マクベス様、御機嫌好う。コオドルの殿様、御機嫌好う。

第三の魔女

マクベス様、御機嫌好う。今に王様におなりなさいませね。

マクベス



パンコオ

あんな結構な事を言つてゐるのに、なせそんなにぎくりとして、心配らしい様子ををするのだ。(魔女等に)眞實に掛けて問ふのだがな、お前達は空想假現けげんのものか。

それとも見掛の通の實物か。お前達は己の友達に挨拶をするのに、現在の福を指すばかりか、未來の所領や

國王の位を擧げて大きい豫言をしたので、友達は呆れてゐる。

若しお前達に「時」の苗床を覗いて見て、

どの種は生える、どの種は生えぬと云ふことが分かるなら、

お前達に福を授けて貰はうと思はず、

お前達の憎を受けることを畏れもせぬ己に言へ。

第一の魔女

おめでたう。

第二の魔女

おめでたう。

第三の魔女

おめでたう。

第一の魔女

あなたマクベス様よりは小さくて、大きく入らつしやるわ。

第二の魔女

あなたマクベス様程お爲合ではなくて、お爲合だわ。

第三の魔女

あなたの所ところには王様達がお出来なさるの。あなたはおなりなさらないが。



ですからマクベス様、バンコオ様、ごなたもおめでたいわ。

第一の魔女

バンコオ様、マクベス様、ごなたもおめでたいわ。

マクベス

待て。半分物を言ふ女子達。もつと聞きたい。

シネルが死んだので、いかにも己はグラミス侯になつてゐる。

だがなせコオドル侯と云ふのだ。コオドル侯は生きてゐる。

あれは、好運の男だ。その上國王になるなぞとは、

コオドル侯になると云ふにも劣らぬ、

思ひ掛けぬ事だ。一體そんな不思議な事を

どうして知つてゐる。それになせこんな荒れた野原で

己達の往手に立ち塞がつて、そんな豫言めいた挨拶をする。

どうぞ頼むからそれを明かしてくれ。

(魔女等消え失す。)

バンコオ

あぶくは水に浮くやうに、土からも出る。

あいつ等はそれなのだ。どこへ消えて行つただらう。

マクベス

虚空に消えたのだ。形があるらしく見えたのだが、

息が風に散るやうに散つた。もつとゐてくれれば好いに。

バンコオ

ふん。一體今かう噂をしてゐる奴等が實際こゝにゐただらうか。

それともお互に物の分からなくなるやうな

毒草の根でも食つたのか。

マクベス



マクベス

おぬしの子供は王になると云つたなあ。

バンコオ

お主は自分でなるさうだ。

マクベス

その上ヨオドル侯にもなる筈だつた。さう云つたやうだなあ。

バンコオ

うん。文句も意味もその通だつた。そこへ来るのは誰だ。

(ロス、アングス登場。)

ロス

マクベス。おぬしの勝利の知らせを陛下は喜んで聞かれた。それから賊軍との戦闘におぬしが率先して、



危険を冒した事を聞かれたとき、

どれ丈を臣下の功、どれ丈を御自身の徳に歸して好からうかと、

驚異感歎の間に迷つてゐられた。そこで陛下は詞もなく

戦闘のあつた一日の名残を回顧せられて、

おぬしが勇猛なノルエイ軍の中に切り込んで、

自分で拵へ出した恐ろしい<sup>みなころし</sup>塵殺の幻に

びくともせずにある様子を思ひ浮べられた。霧の降るやうに、

報告は踵を接して来た。そしてどの報告も、

國家の防禦のために盡したおぬしの名譽を持つて来て、

それを陛下の前に、ぶちまけたのだ。

アングス

我々は

マクベス



陛下の感謝を齎す使だ。

只おぬしを御前へ案内する丈の役だ。  
酬むくいをするのではない。

ロス

併しもつと大きい他日の論功行賞の手附に、

おぬしにコオドル侯の稱號を遣ること丈傳へいと仰せられた。  
そこでこの新しい稱號のお喜よろこびを言はう。

おぬしのものになつたのだから。

バンコオ

(脇へ向きて。)はてな。悪魔奴が本當の事を言つたかな。

マクベス

併しコオドル侯は生きてゐるではないか。

なせ己に借着をさせるのだ。

アングス

如何にもコオドル侯であつた人は生きてゐる。

併しもう重い宣告を受けて、自業自得で

失ふことになつた命を、今はかつく支へてゐるのだ。

ノルエイ王に氣脈を通じてゐたためか、

賊に秘密の幫助や便宜を與へたためか、

それとも兩方で國家の破滅を謀つたためか、それは知らぬ。

兎に角白狀もし證明もせられた叛逆の罪で、

前のコオドル侯は倒れたのだ。

マクベス

(脇へ向きて。)グラミス侯の上にコオドル侯と。

マクベス



一番大きいものはまだ残つてゐる。○いや。おぬし達は御苦勞だつた。

(バンコオに。)

ごうだ。己をコオドル侯にした奴等が、

おぬしの子供達を王にすると約束した以上は、

おぬしはさう云ふ望が起りはせぬかな。

バンコオ

あれを悉く信ずると、おぬしは

コオドル侯になつた丈では満足が出来んで、

王冠に望を掛けることにならう。だが不思議だな。

動もすると、人を否運に落さうとして、

暗黒の手先が眞實の事を明かすことがある。

さう云ふ時は人をひどい嵌はめに落さうとして、

眞面目まじめな小事でおびき寄せるからな。○

おぬし達、少し話があるが。

マクベス

(脇へ向きて。)王位問題の

仰山な狂言の前幕に、

眞實が二つ言はれた。○いや。おぬし達には感謝する。

(脇へ向きて。)ごうもこの超自然の要求は

悪あくだらうか、善ぜんだらうか。若し悪なら、

なせ眞實を以て始まる事實を

己の手に握らせたか。己はコオドル侯になつたぢやないか。

若し善なら、なせ己の頭の髪が逆立つて、己の落ち着いた心の臓が、

平生の性質にも似ず、肋骨あはらほねを打つやうな、恐ろしい幻を

マクベス



己に暗示するのだ。

現在の恐怖なんぞは、

その恐ろしい幻に比べて見ればなんでもない。

弑逆はまだ空想に過ぎぬのに、その一念が早くも

己の平生の人格をゆさぶり動かして、

その運用は疑懼の中に埋没せられる。

實は何事もないのに。

バンコオ

あの喜に心を奪はれてゐるのを見給へ。

マクベス

(脇へ向きて。)なに、運命が己を國王にするなら、好いわ、己に手を下くださせずに、王冠を戴かせてくれるが好い。

バンコオ

新らしい名譽を不意に得たのは、

變つた衣裳を着たやうで、

體に慣れるまでは着心が悪いものだ。

マクベス

(脇へ向きて。)どうにでもなるが好い。

どんなむづかしい日にも時は矢張立つものだ。

バンコオ

マクベス。我々はおぬしを待つてゐるのだが。

マクベス

いや。許してくれ。

己の變になつた頭が、疾づくに忘れてゐた事を

マクベス



己に考へさせたのだ。おぬし達の骨折は、

己の毎日繰り返して讀むペエジの中に書き入れてある。

さあ、陛下の御前ごぜんに出よう。○

けふあつた出来事はおぬし覚えてゐてくれ。

そして時がもつと己達に熟考させてくれた上で、

互に胸襟を披いて話さうぢやないか。

バンコオ

無論好からう。

マクベス

それまではこれ切にしよう。○さあ、行かう。(退場)

第四場 フォレス。宮中の一間。

奏樂。ダンカン、マルコム、ドナルベン、レノツクス

並に従者等登場。

ダンカン

コオドル侯の爲置は濟んだか。

申し附けて遣つた者共は歸つたか。

マルコム

いや。まだ歸りませぬ。

併しコオドル侯の絶命を見て來たものの話を

わたくしは聞きました。その者の申しますには、

侯は叛逆の次第を綺麗に白狀して、

マクベス



陛下に罪を謝して、

十分悔悟の意を表しましたさうでございます。

兎に角生涯のあらゆる振舞よりも死様が好かつたと申します。

なんでも無用の玩具のやうに、人間最高の物を擲つて、

潔く死に就く工夫を、平生からしてゐた人のやうに、

死んだと申すことでございます。

ダンカン

ふん。

容貌で心術を知る法はないでな。

あれは絶待の信用を置いて遣つた

男であつたが。

(マクベス、バンコオ、ロス及アングラス登場。)

おう。マクベスカ。

今もお前の恩義に報いずにある罪を、

深く感じてゐた所であつた。どうもお前の立てる功の足取が餘り早いので、

褒美はどれ程達者な翼で飛んで行つても、

追ひ附かぬのぢや。一體も少し手柄を控へてくれれば好いのぢや。

さうしたら手柄と褒美との都合が保つて行かれたらう。

どうもどれ程報酬をしてもし切れぬ程、

お前が働いたのだと云ふ外無いな。

マクベス

いえ。わたくしのいたす忠勤は、それをいたすのが、

其儘御褒美になるのでございます。

陛下はその忠勤をおさせになれば好いのです。

マクベス



我々の忠勤は王室國家に對する臣子の分です。  
陛下の御慈愛、御眷顧のために何事をもいたすのが、  
分を盡すと云ふものでございます。

ダンカン

いや。兎に角嬉しい。

お前は最初己の植ゑ附けた物だから、

お前が育つて榮えるやうに、己は骨を折らなくてはならぬ。

○バンコオ。お前の手柄も劣りはせぬ。

又己のそれを認めてゐることも外には譲らぬ。さあ、抱き合つて、  
胸と胸とを合させてくれい。

バンコオ

いえ。若しわたくしが

育ちましたら、收穫は陛下の物でございます。

ダンカン

おう、満ちて溢れる己の喜は、

嬉涙の蔭に隠れる。子供。王族。諸侯達。

その外己の身に近いお前達。聞いてくれ。

己は嫡男マルコムを

世嗣に立てて、

今後キャンバアランド公と稱へさせる。

併しその名譽を彼一人に、引離して授けはせぬ。

總て功績のある人達の上には、貴族の印が

星のやうに輝かんでではならぬ。○さあ、これからインワネスへ往かう。

どうぞ將來は入魂じふこんにしてくれられい。



マクベス

いえ。跡の爲事はお上を煩はすまでもござりませぬ。  
わたくしがお先觸になりまして、  
御臨幸になると云ふ喜ばしい便を妻に傳へませう。  
そんならこれでお暇いたします。

ダンカン

そんなら後に逢はう。

マクベス

(脇へ向きて。) ふん。キャンバランド公か。己の往手に横はつた一階段だな。  
己は躓いて倒れるか、踏み越えて進むかだ。  
ああ。空の星。どうぞお前の光を頼してくれ。  
己の暗黒な、遠大な願望を光明で照されてはならぬ。

眼は手を遠ざけようとしてゐる。爲遂げた上で

目が見ることを憚る事だが、まあ、なるやうにさせて置かう。(退場)

ダンカン

ほんにバンコオの云ふ通だ。あれはいかにも勇猛で、  
あれを褒めるのを聞くのが己は嬉しい。

その詞が己には馳走だ。己達を歓迎しよう云ふ親切から、  
先へ行つてくれた、あの誰にも比べやうのない男の跡を追つて、  
さあ、一しよに行かうぢやないか。(奏樂。退場。)

第五場 インワネス。マクベスの城の間。

マクベス夫人手紙を読みつつ登場。

マクベス



## マクベス夫人

「その女子等に出逢ひしは戦勝の日の事に候。女子等が人智の及ばざる事を知り居候をば、拙者確に認め候。拙者今少し問ひ糺し度、氣をいらち候に、女子等は一陣の風を起し、その中に消え失せ候。拙者は驚異の餘りに、喪心して立ち居候所へ、陛下の使参り、拙者をコオドル候と呼びて祝ひ候。このコオドル候の稱號は使の來る直前に、不思議の女子等が拙者を見て口に稱へ、さて今に王様になられると未來を豫言せし稱號に候。御身も后たるべき豫言を受けながら、それを告げざる時は、拙者と喜を共にせらるるに由なきわけ故、此事を通信する方然るべしと存寄候。只御胸に秘め置かれ度存候迄に候。餘は面晤に讓候。」

現にグラミス候でお出になる。コオドル候でもお出になる。

そこで豫言をお受になつた地位にもおなりなさらなくてはなりません。

只心元ないのはあのお氣質ぢや。運命の近道にお踏込なさるには、

人道の乳汁が餘りたつぷりお有になる。大望は持つてゐられる。

名譽心にも御不足はない。だがその上なくて慥はぬ

意地悪がお出来にならない。どんなに慾がお有になつても、

それを正道で遂げようとなさる。人を騙すことはお嫌であて、

不正から生ずる利益をお望になる。「これを得るには、

かうすべきだ」と云ふお心持にはなせおなりなさらぬ。

そしてなさるのをお憚になるやうな事を、

なせなさらずに遂げようとは思召す。ほんに早くお歸遊ばせば好い。

そしたらわたしの意氣込をお耳に吹き込んで上げようもの。

運命や超自然の力は、どうやら黄金の冠を

あの方のお頭に載せようとしてゐるらしい。



その前途に横はつてゐる一切の邪魔をわたしの此口先で  
拂つてお上申したいものぢや。

(従者一人登場。)

なんの用だえ。

従者

陛下が今晚こちらでお泊になります。

マクベス夫人

なに。氣の狂つたやうな事を。

殿様が陛下のお側にお出なさるではないか。若しさうなら、  
お待受をするやうに、使で言つておよこしなさる筈ではないか。

従者

いえ。全くでございます。殿様ももうお歸になります。

同役の者が一足先に参りました所が、  
息が切れさうになつてゐまして、  
口上が申し上げられませんので。

マクベス夫人

おう。そんなら介抱してお遣。

それは大事な使であつた。(従者退場。)

此城内へ、

運命に見放されたダンカン王が、來ると知らせて鳴く鴉は、  
鴉まで聲が嘎れてゐる。さあ、殺伐の念を待ち受けてゐる靈共、  
ごうぞ來てこのわたしを女子でなくしておくれ。  
そして残忍な心がわたしの頭の頂わたまいただきから足の爪尖まで  
溢れるやうにしておくれ。わたしの血を煮え詰らせておくれ。

マクベス



悔と云ふものの入口や通路を塞いでおくれ。

そしたら不慮の性分がふと出て来て、

恐ろしい企を挫いたり、計略と成功との間に

調停を試みたりしないだらう。お前達、殺戮の鬼共。

どこで目に見えぬ物の中に隠れて

人間の厄難を待つてゐるか知らぬが、さあ、このふくよかな胸に来て、

乳房の中の乳汁を苦い膽汁にしておくれ。さあ、闇夜も来て

わたしを地獄の暗い烟で裏んで、

わたしの鋭い刃が自分の附ける創を見たり、

天が雲の帷から窺いて、「待て」と云つたりせぬやうにしておくれ。

ああ。グラミス侯兼コオドル侯が

(マクベス登場)

お歸遊ばしましたね。

それよりかもつと大きく、今に王様におなりになる方と申しませうね。

お手紙を拜見して、わたくしはこの馬鹿らしい現在の外へ

自分を持つて行かれてしまひました。わたくしはこの現在の中で、

もう未來を感じてゐますの。

マクベス

今夜ここへ

陛下がお出になるがなあ。

マクベス夫人

そしてお歸は。

マクベス

あしたの積でお出になるのだ。

マクベス





マクベス夫人

そのあしたと云ふ日に、

日が出ないでしまへば宜しうございます。

申し、殿様のお顔は書物のやうで、その中にいろんな事が

書いてあるのが読めますのね。「時」を騙すには「時」その物のやうに

お見せ掛け遊ばせ。お目にも、お口にも、お手にも

歓迎の様子をお見せ遊ばせ。あの罪のない草花の様にお見えなすつて、

蔭には蛇が隠れてゐなくては行けませんの。

お客は好くおもてなし申さなくてはなりません。

そして今晚の大事な爲事は、わたくしの骨折にお任下さいまし。

これから先、長い月日の權勢も威光も、

これ丈で極まるのでございますからね。



マクベス

まあ、跡で精しく相談しなくては。

マクベス夫人

つひ晴々して入らつしやいまし。

顔色を變へると云ふことは物を懼れてゐる徴になりますからね。

その外の事はみんなわたくしがお引受申します。(退場。)

第六場 同じ土地。城門前。

高調木笛。マクベスの従者等待てり。ダンカン王、マルコム、

ドナルベン、バンコオ、レノツクス、マクダツフ、ロス、アン

ガス、並に従者等登場。



王

此城は心持の好い所に立ててあるな。軽らかな、  
薫のある空気で、人の官能が心地好く  
和げられてゐる。

バンコオ

仰の通、大空の息がここで人を誘ふやうに薫つてゐるのは、  
あの寺や祠に住む習の夏の賓客、燕がここに  
喜んで巢食ふのを見ても分かりません。  
庇も、檐も、石の柱も、  
用に立つ丈の隅と云ふ隅に、燕は自分の弔牀と、  
雛を入れる搖籃とを造つてゐます。

どこでも此鳥が喜んで棲んで、子を育ててゐる所は、  
空気が宜しうございます。

王

みんな見い。奥方が来られた。

(マクベス夫人登場)

一體人の受ける親切と云ふものは、ごうかすると却つて累になるものぢや。  
併し親切は親切だから、矢張難有く受けんではならぬ。  
此場合にあなたに申しますが、かう云ふ御心配とお骨折のためには  
神がどれ程お報をなさるものとお待受なされても宜しいでせう。

マクベス夫人

いいえ。

陛下の當家へお加になる深い、廣いお恵に比べますと、

マクベス



わたくし共のいたす事は、これをも二度宛いたして、それを又繰返しましても、所詮物足らぬやうに存じます。

古い御恩の有り餘ります所へ、

又この様な新しい御恩を蒙りましては、御祈禱ばかりいたす坊様のやうに、わたくし共はいつまでもお禮をいたしてゐなくてはなりませんまい。

王

痛み入ります。

所でコオドル候はごちらですか。我々もすぐお跡から馬で急いで参つて、お宿を願ふ使は自分で勤めようと思つて存じましたが、なか／＼お馬がお早かつたのです。拍車が馬を早めるよりは、奥方を思はれる情が乗手をせき立てて、とう／＼先へ着かれました。そこで美しい、御親切な奥方に願ひますが、今晚は一同御厄介になりたいもので。

マクベス夫人

いえ。陛下の臣下は

自身は勿論、一切の所有を皆お借申してゐるのでございます。若しわたくし共に對して決算などを遊ばさうと思召すと、それは何もかもお手元へそつくり戻つてしまひませう。

王

さあ、お手を拜借しませう。

どうぞ御主人の所へ御案内下さい。わたくしは御主人が非常に好です。そして永遠に御親密にいたしたいと思つてゐます。

さあ、参りませう。(退場。)



第七場 同所。城内の一間。

高調木笛、松明。主膳一人並に皿鉢等を持って  
従者數人登場し、舞臺を横切る。次いで

マクベス登場。

マクベス

遣つてしまつた時、それ切で萬事済むものなら、  
早く遣つてしまふが好い。

若し殺戮自身が一切の成行を済ませるものなら、  
そしてそれが済むと同時に、終局の勝が制せられるものなら、  
只此一擧が一切の事をここで果すものなら、  
ここで、この「時」の淺瀬の上で果すものなら、

己は未來の生涯を一足に飛び越したい。

だがこんな場合には刑の宣告は即座にある。

他人に與へる筈の血腥い訓戒が、與へるや否や、戻つて來て、  
その教を垂れた此身を責める。かう云ふ時の私の無い正義は、  
毒酒を盛つた杯を、それを盛つたわが唇に當てさせるのだ。

あの男は今二重の倚頼心を持つてここに泊つてゐる。

一つは己があゝの男の親戚で、又臣下だと云ふことで、  
ごちらも己の爲事を妨げようとする。

今一つは弑逆を企てるものに對して閨の扉を鎖す筈の東道主人だから、  
よもやそれが自身に刃を取りはすまいと云ふことだ。  
その上あゝのダンカンはあるな柔らかな性質を持つてゐる。  
王位に就いてゐてもあんなに公明に振舞つてゐる。



して見ると、あれを殺したと云ふ恐ろしい悪事に對して、あの男の徳が、丁度金笛の聲を持つた天使のやうに、自分を辯護することだらう。そして同情が、丁度裸の赤子が風に騎つて來るやうに、又天使が空を行く無形の馬に騎つて來るやうに、誰の目の中にも恐ろしい悪事の蹟を吹き込んで、涙を風の濕る程流させるだらう。己には此企を獎ましてくれる動機はない。只自分で自分を飛び越して、向側へ往つて轉ぶやうな、あぶない野心がある丈だ。

(マクベス夫人登場。)

さあ、どうしたものだらう。ごんな按排だい。

マクベス夫人

もう食事が濟み掛かつてゐますわ。なせ席をお立遊ばしたの。

マクベス

己の事を問はれたかい。

マクベス夫人

あの聞いてゐたのを御存じなくつて。

マクベス

此事はもうこれから先、運ばせずにはまはうぢやないか。

陛下はまだ己に榮職を授けられたばかりだ。

そこで世間のあらゆる人間が己に大した信用を置いてゐる。

この新しい榮華を身に受けてゐても好いぢやないか。

すぐにそれを抛つにも及ばぬ事だ。

マクベス



マクベス夫人

まあ、そんならあなたがお身をお飾になつた

あの「希望」は酔つてでもゐましたの。そしてその後寐でもしまひましたの。

そして今日が醒めて、あんな氣高い心持で始めた事を

蒼ざめた顔をして見てでもゐますの。さうだと今からは

あなたの御愛情だつてそれ丈にしか受け取られませんかね。

あなた御自分の御希望と同じ程の力を、御行状と御膽略とにお出しになるのを

憚つて入らつしやいますの。あなたの生涯の飾だと思召す事に

望を掛けて入らつしやりながら、

御自分の目にも卑怯だに見えるやうにおなりになつて、

あの諺にある氣の毒な猫のやうに、

「欲しい」と云つた直後で「出来ない」と仰やるお積なの。

マクベス

もう廢してくれ。

男のすべき程の事は、己はなんでも思ひ切つてする。

それ以上の事を敢てするのは男ではない。

マクベス夫人

さうだとあのお企を

わたくしにお打明なさいましたのが男らしくなかつたわけでございますね。

本當はあれを思ひ切つてお打明なすつた時が、男で入らつしやつたのですわ。

ですからあの時よりもつと進んでお出になると、

一層男らしくおなりになるのです。

あの時は時も所もまだ限られてゐませんでした。それをあなたは造らうと思召した。

今二つ共ひとりでに出来ましたのに、その好機會が却つてあなたを挫折させました。



わたくしは子供に乳を飲ませたことがございます。そして乳を飲む  
赤ん坊を可哀がるのがどんなに好い心持だか知つてゐます。

それでもあなたがわたくしにお誓なすつたやうに、

わたくしがあなたに誓ひましたのなら、その赤ん坊がわたくしの顔を見て、  
笑つてゐます最中に、齒の生えてゐない口から乳房を引き放して、  
頭を割つて脳味噌を敲き出してでも遣ります。

マクベス

だが爲損じたら。

マクベス夫人

爲損じ。

でも御勇氣を行止の所まで迫り上げてなすつたら、

爲損じなどはなさいませぬ。一日の旅には過ぎた道を來て、

いつもよりしつかりと寐込む筈の)

ダンカンが寐入つたら、わたくしが侍従二人を葡萄酒と

香料入のエエルとで酔ひ倒れさせます。

そして正氣と云ふ脳髓の門番が烟になつて、

理性の入物が只の蒸餾釜になるやうにいたします。

そこで盛り潰された侍従共の「本性」が

死に殊ならぬ豕めく眠に陥いつてゐましたら、

番人の無いダンカンをおなたとわたくしとがどういたさうと

勝手ではございませぬか。又わたくし共がいたした弑逆の罪を

被なくてはならぬ酔どれの侍従共を

どうにでもいたされようではございませぬか。

マクベス

マクベス



何事にも動せぬお前の體質は男性の物より外

いや。お前これから男ばかり産め。

組み立てる事が出来まいからな。好いわ。同じ部屋に寝てゐる二人に

我々が血で印しるしを附けて遣つて、其上あいつ等の短剣を

使つて遣つたら、あいつ等の爲業と受け取れぬ

筈がなからう。

マクベス夫人

それに陛下がお亡くなりになつたと申して、

わたくし共が聲を立てて泣いたり騒いだりいたしますのですから、

誰も疑ふ筈がございませんわ。

マクベス

好いわ。己は腹を据ゑた。

己の體にある丈の力を緊張させて、この恐ろしい爲事に掛かるとしよう。

往かほつきけ。一番好い顔附をして一時を糊塗こごして遣れ。

偽いつはりの心の知つてゐる事を、偽の顔が隠さんではならぬからな。(退場。)



第二幕

第一場 インワネス。マクベスの城の中庭。  
バンコオとフリアンスと登場。松明を把れり。

バンコオ

もう今夜は何時だらうな。

フリアンス

月はもう入つてゐます。時の鐘は聞きませんでした。

バンコオ

今夜の月は十二時に入る筈だ。

フリアンス

もつと遅いやうでございますね。

バンコオ

待て。己の此刀たうを持つてゐてくれ。なんでも天で儉約けんやくをすること見えて、  
明あかりを皆消けしてしまつた。序ついでにお前まへこれも持つてゐてくれ。

どうも己は鉛なで押し附つけられるやうに眠ねたくてならぬ。

その癖くせ寐ねてしまひたかないのだ。○ああ。慈悲じのある神達。

どうぞ寐ねてゐる間に自然しぜんが己おれに通とほはせる、あの怪あやしからん考かんがを

引き止とどめてくれられい。○もう好いい。その刀たうを戻かへしてくれ。○

誰たれだ。

(マクベス並に松明を把れる一従者登場。)

マクベス

マクベス



大事な者だ。

バンコオ

や。まだおぬしも寝ずにゐたか。陛下はもうお休になつた。  
けふはいつもにない御機嫌で、

おぬしの所の家來共にたつぶり下され物があつた。

此金剛石は大層親切に世話をして貰つた奥方に、

御挨拶の印しるしに上げたいと仰やつたのだ。

兎に角非常な御満足の御様子だつた。

マクベス

いや。用意をする隙がなかつたから、

思ふばかりで至らぬ勝だつた。

思の儘になるもつと御馳走が出来たのだが。

バンコオ

なに。萬事旨く行つた。

己はゆうべあの三人の怪しい女の事を夢に見た。

あいつ等はお主に本當の事を言つたのだつた。

マクベス

己はもうあの事は思つてゐない。

だが都合の好い時があつたら、

あの事に就いてお主に少し話したい事がある。

いつが好いか言つてくれんか。

バンコオ

それはいつでも好い。

マクベス

マクベス



話した上で、お主が己に同意してくれるなら、  
己はお主に感謝するのだが。

バンコオ

それは己の幸福を高めようとして、  
却つて禍を招くやうなことでなく、胸を綺麗に持つて、  
臣下の節を守つて行かれることなら、  
お主の相談を受けようとも。

マクベス

まあ、それは其時として。ゆつくり寐い。

バンコオ

難有う。お主もゆつくり。(バンコオとフリアンスと退場。)

マクベス

己の飲む物が出来たら、ベルを鳴らして貰ひたいと、  
奥さんに言つてくれ。お前は寝ても好いぞ。(従者退場。)  
あれは短刀だらうか。欄が己の方に向いて  
己に見えるのは。さあ、來て己の手に攫まれて見ろ。  
こいつ己の手には取られんが、目にはいつも見えてゐるな。  
ゆゆしい幻奴。目に見える通に  
手には障らんのかい。それともお前は  
熱に襲はれた脳髓の生んだ  
只の心の刃か、偽物か。  
その癖まだ手に取るやうに目に見えてゐるな。  
己が今抜き放つ此短刀と同じやうに見えてゐるな。  
お前、己の往かうと思つた道の案内をするのだな。

マクベス



丁度己の心が使はうと思つた得物が目に見えるのだ。

これで己のあらゆる官能が正氣であるのなら、目丈が狂つてゐるのか。

それとも目が一切の官能に増して鋭いのか。まだ見えてゐるな。

それにさつきまでは無かつたのに刃と欄どに

血が滴つてゐるぞ。なに、實はなんにもありはせぬ。

己の血腥い爲事が己の目に

あれを見せるのだ。

今は地球の半面で、自然が死んだやうに

休んでゐる。帷に覆はれた眠を

悪夢が襲つてゐる。蒼ざめたへカテに

魔術師が贊を献じてゐる。夜番に吠える

狼に呼び醒まされて、残酷な死が、



陰險なセクスツス・タルクキニウスのやうな足取で、

目當めあたの場所へ、物の怪けのやうに

忍び寄る。お前、確かな、堅固な土地。

歩いて行く己の足音を聞くなよ。

道の小石が己の往手を口走つて、

今にふさはしい時刻の恐ろしさを

破つてはならぬ。己は脅すのに、相手はまだ生きてゐる。

爲る事の熱に較べると、詞は餘り冷かに聞える。

(鐘の音。)

己が往けばすぐ爲事は済む。あの鐘は己を呼ぶのだ。

ダンカン。あれを聞かれるな。

あれは御身を天堂か地獄かへ迎へる鐘だ。



(退場。○マクベス夫人登場。)

マクベス夫人

人を酔ひ倒れさせた酒がわたしを大膽にしてくれた。  
人の渴を消すやうに、わたしの火を煽つてくれた。

おや。なんだらう。あれは梟が鳴いたのぢや。

氣味の悪い聲で「お休なさい」を言ふ夜番ぢや。

今爲てお出なさるのぢや。戸は開いてゐる。

くらひ酔つた臣下の奴等は軒で職務を瀆してゐる。

生きてゐるか、死んでゐるか分からぬ。

生死が互に争ふやうに、爛をした乳酒に

わたしが薬味を入れてやつた。

マクベス

(奥にて) 誰だ。こら。

マクベス夫人

おや。目を醒ましたのぢやないかしら。

まだ爲遂げぬうちに。爲事ではなくて、企が

こちらを陥れるのか。おや、あの音は。あいつ等の短刀は

わたしが出して置いた。お見附なさらぬ筈はない。寐顔が

お父う様をつくりでなかつたら、わたしがしたのだ。申し、殿様。

(マクベス再び登場。)

マクベス

爲事は遣つた。物音が聞えはしなかつたか。

マクベス夫人

いゝえ。梟の聲と、それから蟬が聞えたばかりでございます。

マクベス



何か仰やつて。

マクベス

いつ。

マクベス夫人

今。

マクベス

己が降りて来た時か。

マクベス夫人

えい。

マクベス

や。何か音が。

次の間に寝てゐるのは誰か。

マクベス夫人

ドナルペンさんでございませう。

マクベス

哀<sup>あはれ</sup>なごまだなあ。(兩手を見て言ふ。)

マクベス夫人

馬鹿らしいございますわ。哀だなんて。

マクベス

一人が譏<sup>ねごと</sup>語に笑ふと、

一人は「人殺」とごなつて、二人共目を醒ました。

己は立ち止まつて聞いてゐた。すると二人共祈禱をして、

又寐てしまつた。

マクベス夫人

マクベス



あそこには二人寝かしてありますの。

マクベス

そして己が人切役の手をしてゐるのを見たかと思ふやうに、

一人が「神様、祝福して下さい」と言ふと、一人が「アアメン」とぬかす。

己は臆病者の此言草を聞いてゐたが、一人が「祝福して下さい」と云つても、

己には「アアメン」と云ふことが出来なかつた。

マクベス夫人

そんなにお考込なさらないが好いわ。

マクベス

だがなせ「アアメン」と口の内では言はれなかつたのだらう。

己が一番祝福を願はんではならぬのに、なせ「アアメン」が  
吭に支へたのだらう。

マクベス夫人

こんな爲事の事は跡からそんなに

考へるものではございませぬわ。それでは氣が違つてしまひますわ。

マクベス

己にはこんな聲が聞えるやうに思はれた。「もう寐るな、

マクベスが眠を殺す」と云ふのだな。眠は罪のないものだ。

人の苦勞の纏れたのをほぐすものだ。

その日／＼の性命の臨終だ。勞作の後の浴だ。

傷いた心の靈藥だ。人生の馳走の二の膳だ。

身のためになる主な料理だ。

マクベス夫人

どう思召してそんな事を。

マクベス



マクベス

いつまでも家中で叫んでゐるやうに聞えた。「もう寐るな。グラミス侯は眠を殺した。」

だからコオドル侯はもう寐られぬ。マクベスはもう寐られぬ。」

マクベス夫人

誰がそんな事を言つたと思召すの。まあ、厭な方

そんなに物事を臆病病のやうにお案じなすつて、

わざと勇氣を挫いておしまひなさいますのだけわ。早く入らつしやつて、水で

そのお手の氣味の悪い證據を洗ひ流しておしまひなさいまし。

それになせ短刀を二本共持つて入らつしやつたの。

あそこに置かなくては行けませんわ。持つて行つてお置なさいまし。

そして寐坊二人に血を附けてお置なさいまし。

マクベス

己はもう往かれない。

己は自分のした事を思ふと恐ろしい。

もう一度見ることは己には出来ない。

マクベス夫人

臆病で入らつしやること。

その短刀を下さいまし。寐たものや死んだものは

晝も同じ事でございますわ。晝にかいた悪魔をこはがるのは

子供の目でございますわ。血が出てゐたら、

侍従二人の顔にお化粧をして置いて遣りますわ。

下手人に見えるやうに。

(退場。外より戸を敲く音。)



マクベス

なんと云ふ戸の敲きやうだ。

物音がする度にびつくりするやうではどうもならんが。

まあ、なんと云ふ己の手だ。これで己の目玉を抉り出したくなる。

ネブツヌスの大神の領する限の大洋の水なら、己の此手を

浄めてくれることが出来ようか。いや。却つて此手が

無際限の海水の縁を

一色の赤に染めるかも知れぬ。

(マクベス夫人再び登場。)

マクベス夫人

わたくしの手もあなたと同じ色になりましたわ。でも心の臓があなたのやうに蒼白くはなりませんの。

(外より戸を敲く音。)

南口の戸を

敲いてゐますのね。さあ、お寢間に歸りませう。

ちよいと水で洗へば爲事の痕は消えてしまひます。

造做はありませんわ。あなたの度胸はいつの間にか

どこかへ往つてしまひましたのね。

(外より戸を敲く音。)

あら。又敲いてゐますわ。

早く往つて夜のお召にお召換遊ばせ。どうかして呼ばれて出た時、

起きてゐた事が知れると行けません。

そんなに考へ込んでばかり入らつしやつては厭。

マクベス

マクベス



己のした事が此儘念頭にあるよりは、己は自分分が分からなくなつた方が好い。

(外より戸を敲く音。)

切角ダンカンを敲き起すが好い。ああ、それが貴様に出来るのだと好いが。(退場。)

第二場 同じ土地。城内の一間。

門番登場。(外より戸を敲く音。)

門番

やれ、やれ、敲くわ敲くわ。己が地獄の門番であつたら、さぞ鍵を廻すのが忙しい事だらう。(外より戸を敲く音) どん、どん、どんとお出なさる。悪魔のお頭、蠅の王様のお名前で伺ひますが、ごなた様ですか。豊ヤが来さうなので首を括らうとしてゐる殺

問屋さんですか。丁度好い所へお出なすつた。ハンケチは澤山お持でせうね。ここでは罪滅しにぐつしより汗をお搔なさるでせうからね。(外より戸を敲く音) どん、どん、どんとお出なさる。(今一人の悪魔のお頭のお名前で伺ひますが、ごなた様ですか。さうだ。舌を二枚に使つてごちらにでも誓言をなさる内股膏藥殿ですか。神様の光榮のために、たんと嘘はお衝なすつたが、内股膏藥で天堂にはお這入なさることの出来なかつたお客様ですか。さあ、お這入下さい、内股膏藥殿。(外より戸を敲く音) どん、どん、どんとお出なさる。ごなた様ですか。さうだ。フランス爲立にしると云はれたすぼんの切を盗んだので、こちらへお越になつたイギリスの爲立屋さんですか。爲立屋さん、さあ、入らつしやい。どうぞこちらで家鴨の焼鳥をお拵なさい。あの鬘斗と云ふ奴は妙に家鴨に似てけつかる。(外より戸を敲く音) どん、どん、どんとお出なさる。止所なした。ごなた様ですか。いや。ここは地獄にしては、あんまり寒過ぎるぞ。もう此上地獄の門番を勤めることは御免を蒙りたいものだ。こんなに寒くさへなけりやあ、



くりんざくらの花道を焦熱地獄へ御案内申すに、職業の選嫌はいたさない考ですがな。(外より戸を敲く音) 只今、只今。どうぞ門番の骨折をお忘下さいますなだ。

(門を開く。○マクダツフとレノツクスと登場。)

マクダツフ

かう遅くまで寝なくてはならぬ程

ゆうべ更けてから牀に這入つたのかい。

門番

さやうでございます。ゆうべは二番鳥が鳴くまで頂戴いたしました。ところで酒と云ふ奴の増長させることが三つございますので。

マクダツフ

ふん。酒の増長させる三つとは何だ。

門番

殿様の前ですが、鼻赤、寐坊、長小便でございます。助兵衛になると、殿様、増長もさせますが、又へこませもいたします。いたしたい方は増長させますが、いたす方は駄目にいたします。そこで大酒は助兵衛の方から見ますと、内股膏藥だと申しても宜しうございます。出来<sup>で</sup>かして置いて駄目にする。おだてて置いて邪魔をする。勸めて置いてへこませる。試験に出させて落第させる。詰まり例の内股膏藥で寐入らせて、嘘衝にして置去にいたします。

マクダツフ

どうもゆうべは酒がお前をも嘘衝にしたらしいな。

門番

へえ。大嘘衝にいたしましたよ。だがわたくしは其返報をいたして遣りました。しかも返報がちとひどすぎたかと存じます。奴もちよい／＼わたくしの小股をしやくらうとしましたが、どう／＼負けずにもごして遣りました。



マクダツフ

もう殿様はお起になつたかい。  
や。己が戸を敲いたので起きられたと見える。そこへ來られた。

(マクベス登場。)

レノツクス

御主人、お早う。

マクベス

いや。御二人共お早う。

マクダツフ

陛下はもうお起になつたか。

マクベス

いや。まだだ。

マクダツフ

早く起してくれと仰やつたのだ。  
もう、少し遅過ぎはせんかな。

マクベス

そんなら御寢所へ御案内をしよう。

マクダツフ

勿論これは好んで取られる勞だとは知つてゐるが、  
併し勞を取られると云ふものには相違ないからお氣の毒だな。

マクベス

いや。喜んでする爲事は却つて勞を醫するものだ。  
さあ。これが御寢所の戸だ。

マクダツフ

マクベス



兼てのお指圖だから

御遠慮申さずに御前へ出よう。(退場。)

レノツクス

陛下はけふお立になるのか。

マクベス

さうだ。さう云ふお指圖だった。

レノツクス

ゆうべはひどい荒だつたなあ。我々の寝てゐた所では、  
風で烟突が吹き落された。そして人の言ふのを聞けば、  
空中に泣聲がしたと云ふことだ。變死の人の不思議な聲だとも云ふし、  
又歎かほしい時節が新に醸し出す  
恐ろしい兵燹やさうぐいしい國亂を

氣味の悪い調子で豫言したのだとも云ふ。

それに夜通し梟が鳴いた。

地球が熱を出して震えてゐるのだと云つたものもある。

マクベス

さう。いかにもさうぐいしい夜だった。

レノツクス

己は近年の事しか覺えてをらぬが、

ゆうべのやうな晩はこれまで無かつた。

(マクダツフ登場。)

マクダツフ

さてぐい恐ろしい事だ。

胸に分らせやうも、口に言ひやうもない。

マクベス



マクベス  
レノツクス

何事か。

マクダツフ

いや騒亂の爲出来した無上の爲事だ。

祠荒の弑逆が、神の灌頂を受けた殿堂に押し入つて、  
その造營の性命を盗んだ。

マクベス

なんと云ふ。性命をどうしたぞ。

レノツクス

お主の云ふのは陛下の事か。

マクダツフ

あのお部屋へ近づいて行つて、あの新しいゴルゴの形相を見て、  
お主達の目を毀るが好い。己に言はせようとして呉れるな。  
自分で見て、自分で言つて見るが好い。

(マクベスとレノツクスと退場。)

皆起きろ、起きろ。

非常の鐘を撞け。弑逆だ、謀叛だ。

パンコオも起きんか。ドナルベン殿も、マルコム殿も、起きられんか。

死の影の甘寐を振り落して、

死その物を見るが好い。起きろ、起きろ。

そして最後の審判の日の影を見ろ。マルコム殿。パンコオ。

さあ、墓から脱け出たやうに起きて、亡者のやうによろめいて、

此恐怖の景色を添へるが好い。鐘を撞け撞け。(非常の鐘鳴る。)



(マクベス夫人登場)

マクベス夫人

何事でございますの。

こんな恐ろしい鐘の音が内中の寐てゐた人を  
呼び集めるのは。ごうぞわけを仰やつて。

マクダツフ

ああ、奥方。

わたくしが申すにした所で、あなたのお聞になられる事ではありません。  
それを繰り返して御婦人のお耳に入れるのは、  
恐ろしい弑逆をしたのと同じ事になります。

(バンコオ登場。)

おい、バンコオ、バンコオ。陛下は弑せられておしまひなすつたぞ。

マクベス夫人

まあ、恐ろしいこと。此城の内ですえうか。

バンコオ

ごいこでもせよ、無慙な。

こら。マクダツフ。ごうぞ今の詞を取り消して、  
嘘だつたと云つてくれ。

(マクベスとレノックスと再び登場。)

マクベス

こんな事のある、せめて一時間前に死んだら、己の生涯は、  
祝福のある生涯であつただらうに。もう今から先は、  
現世に眞面目な事は一つも無くなるのだ。  
何もかも戯だ。名譽も恩恵も死んでしまつた。

マクベス



人生の酒は飲み干された。そして只の粕が  
穴倉の誇ほこりに残つてゐるのだ。

(マルコムとドナルベンと登場。)

ドナルベン

何か凶事でもあるのですか。

マクベス

あなたの上にあるのを御存じないのです。

あなたの血の本源が涸れました。

泉その物が涸れました。

マクダツフ

あなたの父王ちちわうが弑せられなすつたのです。

マルコム

誰に。

レノツクス

御寢所にお附申してゐた二人らしいございます。

二人の手も足も血だらけになつてゐました。

それに寢牀の上に拭はずにあつた二人の短刀にも血が附いてゐました。

二人は目を睜つて血迷つてゐました。

誰もあぶなくて近附かれぬやうな様子でございました。

マクベス

ああ。今になつて見れば、己は腹立はらだちの餘に

あいつ等を殺したのを後悔する。

マクダツフ

なせそんな事をしたのだ。

マクベス



マクベス

誰だつて同じ刹那に、分別があつて呆れてゐたり、  
落ち着いておこつてゐたり、忠實で冷澹でゐたり出来るものか。  
誰だつてさうは行かぬ。己の劇しい忠愛の發動が  
落ち着いた思慮を追ひ越したのだ。この所にダンカン王が、  
鮮紅の血潮に白金しろかねの肌を染めて横はつてをられる。  
その刺された創は、破壊力の無慙な進入を促す  
「自然」の綻ほころびのやうに見えてゐる。この所に二人の下手人が、  
彼奴等の惡業の血に染まつてゐる。凝り固まつた血の、  
常ならぬ鞘に覆はれた短刀がある。誰だつて胸に愛情があつて、  
その愛情を見せる膽力のあるものが、  
我慢してゐられるものか。

マクベス夫人

ああ。どうかして下さいまし。氣が遠く。

マクダツフ

それ。奥方に氣を附けて上げんか。

マルコム

(脇へ向きてドナルベンに。)此事件が一番切實に身の上に掛かつて來る我々は  
黙つてゐることゝするかなあ。

ドナルベン

(脇へ向きてマルコムに。)こゝで何が言はれるものか。

今我々の身の上は、錐で揉んだ穴にどんな運命が隠れてゐて、

そいつの手にいつ押さへ付けられて攫まれるか知れないのだからな。

我々の涙はまだ人に見せる程熟してはゐない。



マルコム

(脇へ向きてドナルベンに。)さうだ。我々の深い悲もまだ表には出されない。

ハンコオ

奥方を介抱して上げんか。

(マクベス夫人扶け出ださる。)

そこで今危く暴露せられてゐる我々の赤裸々の弱點を  
早晚覆ふことが出来たら、その上で我々は又落ち合つて、  
この血腥い暴逆事件を十分分かるまで  
調べるところ。恐怖と疑惑とに我々は今ゆすられてゐる。  
己の身を神の大なる御手に委ねて置いて、己はこゝで  
叛逆の姦計の秘密手段と

戦ふのだ。

マクダツフ

己もさうする。

一同

我々もそれに同意だ。

マクベス

兎に角お互に早く男らしい腹を極めて、

廣間へ會議に寄らうぢやないか。

一同

異議なし。

(マルコム、ドナルベンの外一同退場。)

マルコム

マクベス



御身はごうする。お互にあの人達を信用せぬことにせうぞ。  
心にもない歎を見せるのは、

負心ふしんの人にもやさしい勤つとめだ。己はイングランドへ渡る。

ドナルベン

己はアイルランドへ渡る。お互の安全のためには  
運命を分つに限る。我々のある所には

笑あざわらの中の刃がある。血縁が深い丈

その刃は鋭いのだ。

マルコム

今はまだ切つて放たれた殺戮いしごみの弩やが

地に墜ちずにいる。お互の安全な道は

その鋒を避けるにある。さあ、ちつとも早く馬で立たう。

訣別の涙を灑いでゐる時ではない。

さあ、早く往かう。人情の亡くなつてゐる所からは、

身を脱して竊に逃れても恥ではない。(退場。)

第三場 同じ土地。城外。

ロスと一老翁と登場。

翁

わしは七十年このかたの事をはつきり覚えてゐる。

その長い年月の間に、わしは恐ろしい時にも逢つた。

不思議な物も見た。だが氣味の悪いゆうべ一晩が

マクベス



これまでわしの知つてゐた事をなんでもなくした。

□ ス

おい。爺ぢいさん。

あの空を見い。人間の爲業を悲んで、

その血腥い場所を脅してゐる。時計で見れば晝だ。

それにまだ夜闇が空のさまよふ燈火を翳めてゐる。

生々さいくの光に口附くちづけせられる筈の時刻に、

闇が大地の面おもてを埋めてゐるのは、夜が差し出でゐるのだらうか、

日ははにかんでゐるのだらうか。

翁

どうもゆうべの出来事と同じやうに、

不思議でございますね。此前の火曜日かようびの事でございました。

空の高い所で鷹が輪をかいてをりますと、

畑の鼠を捕る梟きょうがそれに飛び附いて殺しました。

□ ス

さうかい。(これも嘘のやうだが本當の話だ。)陛下のお馬だがな、

體が立派で足が早くて、同じ種の中の可哀がられものだったのに、

氣が荒くなつて、厩うまやをこはして飛び出したのだよ。

そして人間と戦争でもする積か、平生の躰たゝまに不似合な

反抗をしたのだよ。

翁

馬同士で食ひ合つたと申すぢやありませんか。

□ ス

さうだつたよ。己は見て呆れてしまつた。

マクベス



ああ。そこへマクダツフが見えた。

(マクダツフ登場。)

どうかい。世間の様子は。

マクダツフ

うん。御覧の通だ。

ロス

あの血腥いともなんとも云ひやうのない事をしたのは誰だか分かったか。

マクダツフ

あのマクベスが刺し殺した奴等さ。

ロス

さうかなあ。

なんのためにしたのだらう。

マクダツフ

人に頼まれたのさ。

陛下の二人の王子、マルコム殿と、ドナルベン殿とは

こつそり逐電せられた。そこで弑逆の嫌疑は、

あの二人の上に掛かるのだ。

ロス

何から何まで不思議だなあ。

自分の命脈の繋がる所を打ちこはすと云ふのは、

なんと云ふ無謀な企だらう。すると國王の位は

多分マクベスのものになるだらうな。

マクダツフ

いや。もう踐祚が済んで、スコオンへ

マクベス



即位式に立たれた。

ロス

そして前の陛下の御遺骸は。

マクダツフ

代々の王の御遺骨を納めることになつてゐる、  
コルムキルの尊い骨堂へ  
もう運ばれた。

ロス

お主もスコオンへ参列するか。

マクダツフ

いや。己はファイフへ往く。

ロス

さうか。己はスコオンへ往くごしよう。

マクダツフ

そんならこれで別れよう。どうぞあつちで萬事旨く行けば好いがなあ。  
兎角新しい着物の着心は馴れた着物のやうには行かぬものだ。

ロス

いや。爺いさん、さやうなら。

翁

はい。どうぞ主のお恵があなた様や、それから總て悪を善に戻し、  
仇を身方にせられる方々に掛かりますやうに。(退場。)



第三幕

第一場 フォレス。宮殿の間。

バンコオ登場。

バンコオ

さあ、これで國王、コオドル侯、グラミス侯と、何もかも  
あの怪しい女子共の豫言した通にお揃なされた。どうもそれを揃へるには、  
随分きたない爲事をなされたらしい。併しこの總てを  
陛下の御子孫にお傳なされるわけには行かぬと云ふのだつたな。  
その未來幾代かの王の父親になり先祖になるのは

己だと云ふのだつたな。そこで女子共の詞が本當なら、どうだらう。

(いや、マクベス陛下、御身に告げた詞は本當だつたからな。)

あれが本當だつたとすると、

己の身の上も豫言通になるものとして、己も未來に

望を掛けても好いわけになるのだ。ああ、もう廢さう。恐ろしい事だ。

(角の聲。國王となりたるマクベス、國妃となれるマクベス

夫人、レノツクス、ロス、貴公子、貴夫人並に従者等登場。)

マクベス王

や。ここにお正客がをられた。

妃

ほんに此方がお出下さらないと、

切角の宴會に穴が開いて、

マクベス



萬事まづくなりますのでございますわね。

マクベス王

實は今晩晚餐會を催す所で、

あなたにも御出席を願ひたいのだ。

バンコオ

いや痛み入ります。

陛下は只御命令なされば宜しいのです。臣下たるわたくしの義務は、永遠に解きほぐすことの出来ぬ紐で、陛下の御命令に結び附けられてゐるのでございます。

マクベス王

けふは午後にごこへか往かれるのか。

バンコオ

仰の通でございます。

マクベス王

それは残念な。さうでないどけふ會議に出てあなたの意見を述べて貰ひたかつたのだが。  
(あなたの有益な意見には、いつも重きを置いてゐるのだから。) 好いわ。あすの事にしよう。遠方へ行かれるか。

バンコオ

いえ、なに。只今から晚餐の時刻までには往復が出来る積でございます。馬が十分歩かぬにいたしましたしても、夜に入つてからの時を一時間か二時間位借りるまでの事でございます。

マクベス王

マクベス



どうぞ晚餐をはづさぬやうにな。

バンコオ

は。きつと間に合ふやうにいたします。

マクベス王

聞けば一族の血腥い若者二人は

イングランドとアイルランドとへ往つたさうな。

そして残忍な親殺の悪業を白状はせずに、

怪しからん流言を放つさうな。だがその事はあすにしよう。

どうせ外の國務も一しよに相談せんではならぬから。

そんなら馬で早く往つて來られい。さらばぢや。

晩に又お目に掛からう。フランス殿も連れて往かれるか。

バンコオ

仰の通で。もう參らんではなりませぬ。

マクベス王

どうぞ乗つて行かれる馬が

足の丈夫な、早い馬なら好いが。

さらばぢや。(バンコオ退場。)

もう晩の七時まで用事は無いから、

皆勝手にせられい。これから暫く一人でゐて、

晩の宴會で皆に逢ふのが、一層愉快に感せられるやうにしよう。

それまでは、皆のもの、さらばぢや。(妃、貴公子、貴夫人等退場。)

こら、貴様。ちよつと用がある。例の男が指圖を待つてゐるか。

従者

かの者共は宮門の外にをります。

マクベス



マクベス王

己の前へ連れて来い。

(從者退場)

かうなつた丈ではなんにもならぬ。

かうなつて安全でなうては、あのバンコオに對する己の疑懼は頗る深い。己の疑懼を招く或る物が

あいつの上品な性分の中にある。あいつは大望がある。

それにあの物におぢぬ氣象に

智略が加はつてゐて、持前の勇を確實な

動作に向けさせる。さしあたりあいつ位

己に憂慮を抱かせるものは無い。己の守護神が

あいつを目の上の瘤にするのは、丁度ケエザルを

マルクス・アントニウスの守護神がけむたがつてゐたやうなものだ。

あの怪しい女子共が最初に己を國王と呼び掛けた時、

あいつは女子共を叱つて、自分に物を言はせた。其時女子共は、豫言らしく、

幾代かの國王の先祖だ云つてあいつを祝福した。

己には子孫が無いものとして、女子共は己の頭に

實の入らぬ冠を戴かせ、又他人の手でもぎ取られる筈の

はかない令の杖を己の拳に握らせた。

若しさうだとすると、己はバンコオが子孫のために

負心の人となつたのだ。バンコオが子孫のために

情深いダンカン王を弑したのだ。只そいつ等のために

己の平和の盃の中に憤懣の

苦みを注いだのだ。只バンコオに幾代かの王を造らせるために、



パンコオの種を幾代かの王にするために、己の永遠な靈の寶を人類のなべての怨敵に遣つたのだ。

そんな事になるまでには、さあ、運命、此間に飛び込んで、己に必死の戦をさせてくれい。○誰だ。

(從者刺客二人を伴ひて登場。)

貴様は戸の外に出て、己の呼ぶまで待つてゐろ。(從者退場。)  
お前方に話をしたのはきのふだつたかな。

第一の刺客

御前の仰やる通で。

マクベス王

宜しい。

そこで己の言つたことを好く考へて見たかな。

年來お前方が不爲合をするやうに、始終押さへ附けてをつたのはあいつだ。お前方がはき違へてゐたやうに、罪の無い己ではないと云ふことが分かつたかな。それをこの前に逢つた時、お前方に分かるやうに、證據を舉げて言つて聞せたのだ。

どう云ふ手で釣られてゐたか、騙されてゐたか、あいつの手先にはどんな奴が使はれてゐたか、その外何から何まで言つて聞せたのだ。五分の魂がある奴にでも、氣の狂つた奴にでも、あれ丈の話で、それはパンコオがしたのだと云はせずには置かぬ筈だが。

第一の刺客

それは承りました。

マクベス王

己はそれを話して、それから更に一步進めた。

マクベス



これが第二段の相談だ。そこであんな事を我慢する程、お前方の性分なまの中では堪忍が勝つてゐるのかい。あの重い手で、お前方を墓の中へ掘ち込んで、お前方の家族を永久に乞食にした難有い男と、そいつの一族とのために祈禱をする程の信者に、お前方はなつてゐるのかい。

第一の刺客

矢つ張人間ですよ。御前。

マクベス王

ふん。帳面前は人間の仲間に入れられてゐるだらう。丁度只の獵犬でも、鹿犬でも、雜種犬でも、鶉犬でも、野ら犬でも、龍犬みづとりいぬでも、水鳥犬みづとりいぬでも、狼犬でも

皆犬と丈は云はれてゐるやうなものだ。所が値段附のある目録には、足の早い奴、のろい奴、敏捷な奴、番犬、探偵犬しんねいと、情深い自然が授けてくれた持前によつて、それ／＼分けてある。この持前次第で、どの犬でも特別な名を附けられる。それが十把一束に犬と書いてある帳面と違ふのだ。人だつてさうだ。そこでお前方もその値段附のある目録に載つてゐる人間なら、人間の一番下等な連中でないなら、さう云へ。そしたら己がお前方の腹に爲事を任せて遣らう。その爲事を遣つてしまへば、お前方の敵が平げられるばかりか、己は胸と情なまけとでお前方を可哀がつて遣るがな。



己はあいつが生きてゐると元氣ではゐられないで、死んで貰ふと元氣になれるのだからな。

第二の刺客

わたくしはね、御前、これまで世間で手荒くこづき廻されましたので、癪に障つて、その世間へ面當つらめてにどんな事をしたつて構はぬ氣になつてゐる人間です。

第一の刺客

わたくしは又、これまで不爲合に萎やされて、運命と云ふ奴に掻きむしられて、もうなんにでも命を掛けて、儲かるなら結構だし、死ぬるなら死んでも好いとしてゐる人間です。



マクベス王

二人共分かつてゐるだらうな。

ふん。バンコオが敵てきだとは、

第二の刺客

分かつてゐますよ、御前。

マクベス王

矢つ張己にも敵なのだ。しかも棄て置かれぬ間柄で、あれの生きてゐる一分毎に、己の命は容赦なく縮められるのだ。それも表向の己の威勢で、あいつを己の目の前から取り除いて、己の志を遂げられると好いのだがな。それが己には出来ぬ。なせかと云ふと、己の友達であいつの友達にもなつてゐるものがあつて、





其人達の感情を己は害したくないのだ。詰まり自分が倒して置いて、泣いて遣らぬではならぬやうなわけだ。さう云ふ深い意味があるので、世間の目を忍んで爲事をせぬではならぬ。そこでお前方に頼んで手を藉りることになるのだ。

第二の刺客

好うがす。

御前のお指圖通に遣つ附けます。

第一の刺客

へえ、命懸で。

マクベス王

おう。性根は見えた。もう一時間程すると、

どこでお前方が持<sup>付</sup>ち受けてゐるが好いか知らせて遣る。十分探偵させた所を、しつくりばつの合ふ都合を知らせて遣る。ごうせ爲事は此城を少し離れた所で、今夜の内にせぬではならぬのぢや。萬事己に尻の來ぬやうに氣を附けるのだぞ。それから親爺と一しよに來る倅のフランスだがな、(爲事を手落の無いやうに、無疵に爲上げるには、)この暗い時刻の運命があの小童<sup>こわっは</sup>をも抱き込んでしまはんでならぬ。小童のゐなくなるのは、親爺のゐなくなると同じ位。己には大切なのだ。ごうぞ早速腹を極めてくれ。己はすぐにもう一度逢ふから。

刺客二人

マクベス



いや。腹はもう極まつてゐます。

マクベス王

すぐにお前方を呼ぶやうにする。あつちで待つてをれ。(刺客等退場。)  
これで極まつた。○バンコオ。お主の靈が此世を離れて、  
若し天に往くのなら、今夜往くことになるのだぞ。(退場。)

第二場 同じ土地。城内の他の一間。

妃と従者一人と登場。

妃

もうバンコオ殿は下がられたか。

従者

さやうでございます。併し晩には歸られますさうで。

妃

あの國王陛下にお隙ならちよつと一言お話申したいと  
申し上げてくれ。

従者

承知いたしました。

(従者退場。)

妃

なんにもならぬ。皆徒事ぢや。

願は慥つたやうでも安心は出来ぬ。

破壊したこちらが心から嬉しがる事が出来ぬやうなら、



その破壊せられた物であつた方が増ぢや。

(マクベス王登場)

おや。あなた、どうなさいましたの。陰氣なお考にばかり

お親遊ばして、お一人でお出遊ばすのね。

そんなお考は的になつてゐる相手が死ぬれば、それと一しよに

死ななくてはならないではございませんか。どうにも直しやうのない事は

構はずに置く外ございません。した事はしたのでございますから。

マクベス王

己達は蛇に傷を附けたが、殺すことは出来なんだ。

創が直つて又元の蛇になる。そして己達の覺束ない悪事は又

毒のある元の牙に脅されるのだ。だが己達が恐怖を懐いて

日毎の膳に向ひ、夜毎に襲つて来る恐ろしい夢に



惱まされながら寐る程なら、寧萬物を組み立ててゐる

蝶番がはづれて、上下の世界が滅びても好い。

己達は落ち着く暇の無い興奮に、いつまでも靈を惱まされてゐる程なら、

寧こつちの地位を造るために、永遠の境に遣つた、あの亡者と

一しよになつた方が増だ。

ダンカン王はもう地の下に眠つてゐる。

人生の消長常なき熱病を通り越して安眠してゐる。

弑逆の一舉は彼に悲惨を嘗め盡させた。もう刃も毒も、

内輪の悪意も、敵の來襲も、何一つ

此上彼を苦めることは無い。

妃

まあ、こちらへお出遊ばせ。



その荒々しいお目なごしをお和遊ばせ。

そして晴々々御機嫌好く今宵の客をおもてなし下さいまし。

マクベス王

おう。己もさうするから、お前もさうしてくれ。

殊にあのバンコオに氣を着けて大事にしてくれ。

顔色も詞もあれには外のものより鄭寧にして貰ひたい。

まだこつちの地位が固まつてゐないのだから、

己達もてなしの禮を世辭の流に浸さんではならぬ。

己達は心がごんなだご云ふことを隠す假面に、

自分の顔をせんでならぬ。

妃

もう分かつてゐます。お廢遊ばせ。

マクベス王

ああ。己の胸には蠍が一ぱいゐる。

お前も知つてゐる通、バンコオと倅フリアンスとが生きてゐるからなあ。

妃

でも親子とも死ぬると云ふことが無い體ではございませぬわ。

マクベス王

いや。そこがせめてもの慰だて。片附けることは出来るのだ。

だからお前も元氣でゐるが好い。實は今宵蝙蝠が

寂しい翼を振ふまでには、又硬い羽に擔はれた甲蟲が、

黒いヘカテの神に催されて、ねむたげな音を立てて、

欠めく夜はのさざめきを聞せるまでには、

恐ろしい爲事が片附く筈だ。

マクベス



妃

ごんな事でございますの。

マクベス王

まあ、お前は好い子だから、出来た爲事を褒めてくれるまで、知らずにて貰はう。○光明を蔽ふ夜闇、さあ、來い。來て惠深い日のやさしい目を隠してくれ。

そしてお前の目に見えぬ、血腥い手で、

己の顔の色を蒼くしてゐる、大きい手形を

塗抹して、すたくくに裂いてくれ。○もう黄昏たそがれになつた。

鴉は時の森に歸る。

書を命にしてゐる善良な物共は首かうべを項垂れて眠らうとする。

それに夜の業わざをするものは獲物えものを覗つて打つて掛かるのだ。○

お前は己の詞を不審がつてゐるな。だが、まあ、ちつとして聞いてくれ。悪で始まつた事は悪で育つて行くのだ。さあ、お前も一しよに來てくれ。(退場。)

第三場 同じ土地。宮殿に通ずる門ある苑。

刺客三人登場。

第一の刺客

己達と一しよになれば、誰がお前には言つたのだ。

第三の刺客

マクベス王だ。

マクベス



第二の刺客

なに。此男を疑はんでもよからうよ。  
己達の受け合つた事、ここで遣る筈の事を  
好く知つてゐるのだから。

第一の刺客

そんなら好いから一しよに遣れ。

まだ西の空には夕焼の跡が残つてゐる。  
道に遅れた旅人は、今宵の宿を志して  
足を早める。そこで待つてゐる鳥が  
そろ／＼遣つて来る筈だ。

第三の刺客

あれを聞け。蹄の音だ。

バンコオ

(外にて。) おい。明を見せんか。

第二の刺客

あいつだ。

案内してある客の名簿に載つてゐる丈の人数は  
もう皆参内したのだから。

第一の刺客

馬を牽かせて遣るやうだせ。

第三の刺客

半道程廻まはりになるのだ。あいつはいつものやうに、  
外の人もする事だが、こゝから御殿の門まで  
歩いて行くのだ。

マクベス





第三幕

第二の刺客

明あかりが来た。明が。

第三の刺客

あいつだ。

第一の刺客

ぬかるな。

(バンコオと松明を把れるフリアンズと登場)

バンコオ

今夜は雨になりさうだな。

第一の刺客

それ。遣つ附ける。(バンコオを襲ふ。)

バンコオ



ああ、遣られた。フリアンズや。逃げてくれ。逃げて。

そして仇を復かへしてくれ。〇え、奴隷奴が。(死す。〇フリアンズ逃る。)

第三の刺客

松明を消したのは誰だい。

第一の刺客

いけなかつたのか。

第三の刺客

倒れてゐるのは一人切だ。小童こわっはは逃げをつた。

第二の刺客

大事な半分をしくじつたぞ。

第三の刺客

好いわ。往かう。遣つた丈の事を申し上げよう。(退場。)

マクベス



第四場 同じ土地。宮殿の大廣間。饗應の準備をなしあり。

マクベス王、妃、ロス、レノックス、貴公子並に従者等登場。

マクベス王

席順は皆御承知だから、着席して下さい。度々の代に一度にお禮を言ふが、皆好く来てくれました。

貴公子等

陛下にお禮を申し上げます。

マクベス王

我々も御身達の列に加はつて、鄭重にお取持をする積だ。

妃は席にゐられるが、いづれ好い折に御挨拶をして貰ふことにしよう。

妃

いえ。どうぞそれはわたくしに代つてお心安い皆さんにあなた仰やつて下さいまし。わたくしの胸は皆さんを歓迎いたしてゐますから。

マクベス王

御覽。皆心からお前に謝意を表してをられる。

お客の数は二列共同じだ。己はこゝの真ん中に据わらう。

(第一の刺客戸口に登場)

どうぞ皆歡を盡して下さい。も少ししたら一同揃つて

健康を祝して飲むことにしよう。○顔に血が附いてゐるせ。

刺客

マクベス



附いてゐりやあバンコオの血です。

マクベス王

うん。それはあいつの身の内を循つてゐるより、お前の皮の外に附いてゐる方が好い。片附けたか。

刺客

吭を切りました。わたくしが遣つ附けました。

マクベス王

そんならお前は吭切の一番の名人だ。だがフリアンスのを切つた奴も矢つ張えらい。若しそれもお前がしたのなら、比類の無い手柄だが。

刺客

御前

フリアンスは逃げました。

マクベス王

すると己の病氣が又作るわい。一體己は丈夫だつたのだ。堅いことは石に負けぬ。根強いことは岩に負けぬ。力を廣く及ぼしてゐることは大地を覆ふ空氣に負けぬ。それが今はせぐくまつて、閉ぢ籠められて、押さへ附けられて、切ない疑懼と恐怖とに縛せられてゐるのだ。だがバンコオはたしかか。

刺客

へえ。御前。たしかに溝の中に倒れてゐます。

頭の上には二十箇所の創が口を開いてゐます。

殺すにはその一番小さい奴で澤山でした。

マクベス王

マクベス



それは難有い。

そこに親蛇は死んでゐるぞ。逃げた小蛇奴は

追つて毒を出すにしても、

差當牙さしあたりが無い。もう好いから往け。

あした又話をしよう。(刺客退場。)

妃

あなたもつこ

御機嫌を好くありません。馳走はいたしましたも、

喜んでいただけると申すことを、拵へても、度々聞せなくては、

嘘になつてしまひます。誰でも食べる丈なら、内が一番宜しうございます。

餘所ではもてなしが料理に味を附けるのでございます。

それがなくては宴會は徒事いたづらごとになります。

マクベス王

好く言つてくれた。

好し。これから皆で旨く食べて、好くこなして、

體のためになるやうにしよう。

レノツクス

どうぞ陛下もお掛下さいませんか。

マクベス王

これでバンコオが来てゐてくれるぞ、

この國の諍ほごりが一堂に集まつたのだ。

横着で來ぬのを恨む丈で濟めば好いが、

何か凶事でもあつて氣の毒がるやうだと困るて。

(バンコオの靈現れ、マクベスの座を占む。)

マクベス



ロス

あの男の闕席は

言を食むに當ります。どうぞわたくし共に免じて  
御容赦なさつて下さいまし。

マクベス王

や。座席は一ぱいちや。

レノツクス

お席はこゝに取つてあります。

マクベス王

レノツクス

レノツクス

こちらでございます。何がさう御機嫌に障りましたか。

マクベス王

一體お前方の中で誰がこんな事をしたのか。

貴公子等

なんでございます。

マクベス王

こら。己がしたのだとは、お主も云ふことは出来まいが。  
え、その血だらけな頭を掉つてくれるな。

ロス

皆お立下さい。陛下が御不例の様です。

妃

いえ。どうぞ皆さんお掛なすつて。折々お上はあんな事がございます。  
お若い時からでございます。どうぞ其儘お掛なすつて。

マクベス



あの御發作はほんの一時の事でございます。

すぐ御恢復になります。皆さんが氣にして御覽になると、

お上は又それを氣に遊ばして、却つて御病氣がつのります。

どうぞ召し上がつて、あちらを御覽なさらないで。○申し、あなた男なの。

マクベス王

うん。しかも大膽な男だ。悪魔が見ても色を失ふやうな

あれを、己は見てゐるのだからな。

妃

まあ、好い物笑でございますわ。

それはあなたの臆病がかいた繪姿でございますわ。

こなひだお話なすつた、あのあなたをダンカンの所へ導いたといふ

空中の短刀と同じ事でございますわ。そんなにぎつくりしやつくりなすつて。

(ほんの臆病の騙す手にお乗なすつて) 冬籠の爐の側で  
女子の話す、お祖母あ様の折紙付の怪談を聞いて  
こはがるやうなものですわ。あなたお恥かしくなくつて。  
まあ、なんと云ふお顔附をなさいますの。今にお直になると、  
虚の椅子しかございませぬのですわ。

マクベス王

どうぞ、あれを見てくれ。見ろ。見ろ。それ、ごうだい。○

なんだ。己の知つた事かい。合點々々が出来たら物を言へ。○

いや。若し骨堂や冢穴が

葬つたものを戻してよこすとすると、角鷹の腹を

墓標の代にせんではないまい。

(靈消え失す。)



妃

どうなすつて。すつかりぼけておしまひなすつたの。

マクベス王

こゝに立つてゐると、見えたのだ。

妃

まあ、恥曝でございますわ。

マクベス王

人道に慚つた掟が國民一般の幸福を進めるまで

昔は随分血が流されたものだ。

それから後も、聞くも恐ろしいやうな

殺戮が澤山行はれた。だが昔は

脳味噌が飛び出してしまへば、その人間は死んだ。

それでおしまひだ。それに今は脳天に  
二十箇所の致命傷を受けても、それが起き上がつて来て、  
人の椅子を取らうとする。殺戮などより  
餘つ程ひどい。

妃

申し、皆さんが

どうなすつたのかとお思なさいますよ。

マクベス王

おう。うつかりしてゐた。○

いや。皆己の事を氣に掛けて下さい。

己は妙な病氣がある。それも己を識つてゐる人には

なんでもないのだがな。さあ。皆の健康を祝することにしよう。



ごりや。己も席に就かうか。○己にも酒をくれ。一ぱい注げ。○  
己は満堂の人達と、それから遺憾ながら此席に闕けてゐる  
良友バンコオとの健康を祝して此杯を干さう。  
バンコオがゐると好いのだが。いや。皆とバンコオとの健康を祝する。  
皆に萬事が成功するやうに。

貴公子等

一同お禮を申して傾けます。

(靈再び現る。)

マクベス王

退け。目障ぢや。地の底へ歸つて往け。

もうお主の骨は髓が枯れて、お主の血は冷えてゐる。  
そのこつちを見詰めてゐるお主が目には

もう視力は無いのぢやないか。

妃

どうぞ、皆さん、あれは不斷の事だご

お見逃下さいまし。全くさうなのですから。

切角の時の、興を損じまするのには困りますの。

マクベス王

おい。人のする程の冒険なら己もする。

毛むくじやらなロシアの熊になりと、角の丈夫な

犀になりと、ヒルカニアの虎になりとなつて遣つて來い。

何になつて來ても、其姿でさへ無いなら、己の丈夫な神経が

戦慄するやうなことは無い。それとも又生き戻つて來るなら、

懸け離れた沙漠で軍刀のしあひがしたいとでも申し込んで見ろ。



其時己が身慄をしてことわつたら、己を小娘のおもちやの人形だとも云へ。退け。氣味の悪い影奴。正體の無い幻奴。退け。

(靈消え失す。)

なんだ。退くか。○あゝ。行つてしまつたな。これでやう／＼男になつた。○どうぞ皆其儘ゐて下さい。

妃

まあ、あなた切角の興を損じて、大事な宴會を駄目になさいましたわ。皆さんの氣になさるやうな、まづい事をなすつて。

マクベス王

夏の空の雲のやうにかぶさつて來ては、  
どうもあゝした事が、

驚かすにはゐられぬ。○なあ、お前。己の顔の蒼ざめるやうなあの幻をお前も見えてゐて、お前の顔の紅が元の儘でゐるのかと思ふと、己はお前のお蔭で自分で自分分からなくなるがなあ。

ロス

どう云ふ幻のお話で。

妃

どうぞなんにも仰やらないで下さいまし。仰やると御病氣が悪くなりますから。問へば問ふ程刺戟することになりますの。皆さん。お暇にいたしましたせう。お上からお暇が出るのをお待ち下さいましな。どうぞ皆さん御遠慮なくお引取下さいまし。

マクベス



レノツクス

そんならお暇いたします。

陛下の御恢復を祈ります。

妃

そんなら皆さん。お休なさいまし。

(貴公子等並に従者等退場。)

マクベス王

あれは血が欲しいと云ふのだ。血は血を欲しがる。

昔から石が動き出したことも、木が物を言つたこともある。

物類相感の理を知るト者共が、

鶉や山鶉や里鶉の聲を聞いて、

隠しに隠した殺戮の跡を討いたこともある。○もう何時なんどきだらうな。



妃

もう夜が暁と闘ひさうになつてをります。ごちら附かすで。

マクベス王

あのマクダッフは呼んでも来ぬが、

お前なんと思ふ。

妃

お使をお遣遊ばしましたの。

マクベス王

こどわつたとは人傳ひとつてに聞いた。だが人を遣つて探つて見よう。

誰の家にも、家來共の中で己の指圖を聴くものが

一人ゐないと云ふことは無い。己はあした、

(少し早くする積だ。)あの怪しい女共の所へ往つて見る。







もつと精しく言はせて遣る。かうなれば極悪い事を  
極悪い手段で聞くことも辭まれぬ。こつちの安全のためには  
どんな道をも踏まんではならぬ。もうこれ迄血の中に  
踏み込んで見ると、途中で足を留めたところで、  
跡へ戻るのも前へ往くと同じやうに難澁だ。  
己の頭には變な物があつて、それが手先へ出ようとする。  
何物だか調べても見ずに、己はそれを實行せんでならぬのぢや。

妃

どうもあなたには、生物いきものに一番大事な、眠と云ふ保養が足りませぬ。

マクベス王

いや。さあ、寝るとしよう。己が物を不思議がつたり、

自分で自分を惑はすのは、初心の臆病だ。これから鍛錬せんでならぬ。



まだ我々は爲事に掛けては生若い。(退場)

第五場 草原。雷鳴。

ヘカテ登場。三人の魔女と邂逅す。

第一の魔女

ヘカテさんけふはどうなすつたの。御機嫌が悪いのね。

ヘカテ

その筈ぢや無いか。恥知らずの、向う見すの

女子達だことね。好くも勝手にあのマクベスなぞに纏はつて、  
謎で人を殺させたね。

マクベス



わたしはお前方のするあらゆる業の師匠で、

禍と云ふ禍の秘密の爲手ではないか。

そのわたしに立ち會はせて、出来た事を

わたしの業の手柄にしようとは、なせしないの。

それよりもつと悪い事があるよ。お前方のそれをさせた

あの相手の男は、意地の悪い、亂暴な

氣まぐれ男ぢやないか。餘所に幾らもあるやうに、

あれは利欲で働くので、お前方を崇めてはゐません。

さあ、填合をおし、さつさと往つて、

あのアケロンの沼の側で、あすの朝

わたしの往くのを待つてお出。そこへあの男が

自分の運命を聞きに来るのだから。



お前方は釜や、薬味や、咒文の本や、

その外なんでもいるものを用意して置いておくれ。

わたしは風に乗つて行く。今宵はわたしが

氣味の悪い、恐ろしい事をする。

その大爲事が夜なかなまでには濟まなくてはならないよ。

あの片割月の角の所に、

利目の強い湯氣の雫が下がつてゐるのを、

地に墜ちないうちにわたしがさらつて、

魔法のランビキに掛けると、

その薬があつた男に變つた心を起させてね、

その心の強い迷に引かれて、あの男は

自分の禍の渦卷に墜ち込んでしまふのだよ。



あの男は運命を貶しめるが好い。死を嘲るが好い。  
智恵も恩も畏も顧みず、大きな望を起すが好い。  
お前方も皆知つてゐる通。  
油断は人間の敵だからね。

(外より「來ませ、來ませ云々」の歌聞ゆ。)

あら呼んでゐるわ。御覽。小さい靈が靄のやうな

雲の中にすわつて、わたしの歸るのを待つてゐるわ。(退場。)

第一の魔女

さあ、お出。急いでしようね。ヘカテさんはすぐ又來るから。(退場。)

第六場 フォレス。宮殿内の一間。

レノツクスと貴公子一人と登場

レノツクス

わたしのこれまで云つた事が、あなたのお考に符合したのですね。  
それから先の解釋はあなたの方でなさつて好い。只わたしの申すのは、  
どうも變な事が出來たものだ云ふ丈です。先づ惠深いダンカン王は  
マクベス王に弔はれることになる。(實に氣の毒な御最期でした。)  
それから勇悍無類なバンコオが餘り夜遅く歩いたと云ふことになる。  
それはあなたさう云ひたけりやあ、フリアンスが殺したと  
云ひなすつても好い。逃げましたからな。夜道は歩くまいものですな。  
一體マルコム殿とドナルベン殿とであの情深い父王を  
弑し奉つたとすると、誰だつてその爲業が



餘り奇怪だと思はずにはゐられません。ひどい事です。

そこでマクベス王は悲に堪へないで、義憤を起して、

すぐに叛逆人二人を殺したと云ふのです。

ところでその二人は飲んだくれの寐坊なのです。

此仇討はお立派ぢやありませんか。それに如才ないですね。

そいつ等が己達ぢやないと云ふのを聞いたら、ごんな人間だつて

胸を痛めずにはゐられませんからね。だからマクベス王は

萬事旨く遣られたと、わたしは云ふのです。わたしの思ふには、

マクベス王がダンカン王の孤二人を牢に入れたらどうでせう。

(まあ、そんな事がないやうに天に祈るのですがね)若しさうなつたら、

二人がさぞ親殺の罪を悔いでせうよ。フリアンスだつて同じ事です。

もう廢やませう。マクダッフなんぞも、餘り正直な事を云つたのと、

暴君の宴會に來なかつたので、わたしの聞いた所では、  
不首尾になつたのだと云ひますせ。あれはどこへ隠れたか、  
あなた御存じですか。

貴公子

あのダンカン王の子供衆ですね。

暴君に相續權を奪はれてゐるお二人ですね。

あれがイングラントの宮廷に往つてゐられます。

幸福の女神がつれなくは當つても、人に敬はれる

氣高さは奪ふことが出來ぬと見えて、

敬虔なエドワード陛下がひどく御愛顧なさるさうです。

そこでマクダッフは向うの陛下に願申しに往つたのですよ。

ノオサンパアランドと軍好いくさ好きのシワアドを起たせて貰つて、



その力を藉りて、(神様の御呵護の下に、)

我々が又飽くまで食ひ、

安らかに眠ることが出来るやうにして貰はうと云ふのです。

祭典、宴會の席から血腥い刃物を遠ざけさせて、

上へは誠實な尊敬を捧げ、上からは自由な榮譽を受けるやうにして、

今の苦難を免れたいと云ふのです。

こつちの陛下は此噂を聞いておこられて、

戦争の支度をしてゐられるのです。

レノツクス

マクダツフに使でも遣られましたか。

貴公子

遣られたです。ところが「わたくしは御免を蒙ります」と

きつぱり云つたので、不機嫌な使はマクダツフに背中を向けて、  
何かぐづく云つたさうです。「今こんな返事を己に背負はせて、  
跡で後悔するな」とでも云ひたい様子だつたさうです。

レノツクス

して見ると、

マクダツフは如才もあるまいが、うかどこつちの陛下に近づかぬやうに  
用心するが好いのですね。どうぞ咀はれた手の下に

惱まされてゐる我々の本國へ、早く祝福が歸つて来るやうに、

神聖な天使でもイングラントの宮廷へ飛んで往つて、

マクダツフの到着するより早く、あれが使命を

傳へてくれれば好いのですが。

貴公子

マクベス





第三幕

わたくしもその天使に祝福を言附けますね。(退場。)



第四幕

第一場 暗き洞窟。中央に沸き立つ釜。雷鳴。  
魔女三人登場。

第一の魔女

焦色の猫が三度鳴いたのね。

第二の魔女

蛸も三度と一度鳴いたのね。

第三の魔女

ハルピエが呼んでゐるわ。もう時刻だ、もう時刻だつて。

マクベス





第一の魔女

釜をぐるりと廻つてお出。

そしてあの毒々しい汁の中に物をはふり込むのだよ。

蝦蟇や。冷たい石の下に

三十一日夜晝ゐて、

寐た間に膚から毒を出した蝦蟇や。

お前一番先にあの魔法の釜の中で煮えるのだよ。

一同

倍お働。倍おかせぎ。

真木は燃え立て。釜は涌き立て。

第二の魔女

沼で育つた蛇の切。



釜の中で煮えろ。煮詰まれ。

蝶螭の目、蛙の足、

蝙蝠の毛に犬の口、

口ばかりの舌、蝮の刺、

蜥蜴の脛に木兔の羽、煮えろ。

大事な魔法ぢや。骨折丈に利かせたい。

煮えろ。涌き立て。地獄で煮える汁の様に。

一同

倍お働。倍おかせぎ。

真木は燃え立て。釜は涌き立て。

第三の魔女

龍の鱗に狼の牙。

マクベス





第三幕

魔女がなつた木乃尹。鹹水の

おこつた鱈の脬と咽。

闇夜に堀つた毒芹の根。

神を瀆したユデア人の肝。

山羊の膽汁。月蝕に削つた

一位の木の木屑。

トルコ人の鼻にタタアル人の脣。

夜鷹が溝の中で生んで、

すぐ絞め殺した赤ん坊の指。

これ丈入れた雑炊を濃くねばるまで煮詰まらせ、

虎の臓腑を入れたのが、

わたし共の釜の中身さ。



一同

倍お働。倍おかせぎ。

真木は燃え立て。釜は涌き立て。

第二の魔女

それを狒々の血で冷せば、

魔法の薬は出来上がるのさ。

(ヘカテ登場)

ヘカテ

好く遣つておくれた。お前方の骨折を褒めて上げる。

得が行けば、皆に割前を上げてよ。

さあ、入れた丈の物に魔法を利かせるのだから、

身軽な女のお化のやうに、

マクベス



釜の周圍に輪を繋いでお歌、お歌。

(奏樂唱歌「黒き靈等」の歌。○退場。)

第二の魔女

おや。わたしの拇指がむづ痒いから、  
なんだかまづい奴が此道を遣つて來るね。  
開けて御覽。見て御覽。  
誰だか知らんが戸を敲く。

(マクベス王登場。)

マクベス王

どうだな。お前方、内證らしい、後暗い、夜かせぎのをばさん達  
何をしてゐるのだ。

一同



なんとも名の附けられない爲事なの。

マクベス王

お前方のしてゐる、その爲事を證に立てて頼むのだがな。  
(それをお前方がどうして知つてゐるにしろ、己の間ふ事に返事をしてくれ。  
お前方は暴風を起して、  
寺々を吹き崩させるのか。  
泡立つ波に舟筏を覆らせて沈めるのか。  
伸びた穀物を寝させるのか。木を吹き倒させるのか。  
城や砦を番人の頭の上に壊え掛からせるのか。  
宮殿や塔を  
屋根が地に附くやうに傾けるのか。  
宇宙萬物の種子の實を、

マクベス





破壊が飽いて病むまでも、一しよにこはしてしまふのか知らぬが、己の問ふ事に返事をしてくれ。

第一の魔女

さあ、仰やい。

第二の魔女

お問なさい。

第三の魔女

御返事しますわ。

第一の魔女

あなたわたし達の口からお聞なさりたいの。それともお師匠様方の口からが好いの。それを仰やい。

マクベス王

ふん、その

師匠を呼んで見せい。

第一の魔女

そんなら家の血をお時、自分の生んだ子家を九疋、自分で食つた家の血だよ。それから人殺の首を絞める臺の木理から染み出した、あの脂もお入、あの火の中へ、さあ、お入。

一同

さあ、出てお出、高い靈でも、低いのも。

自分でここへ現れて、巧者な手際を見せどくれ。

(雷鳴。武装したる首の幻像現る。)

マクベス王

マクベス



こら。己達に知られぬ威力。言つて聞せい。

第一の魔女

申し。

あれには人の心が知れます。なんにも言はずに聞かしやりませ。

幻像

マクベス。マクベス。マクベス。マクダッフに用心しろ。

ファイフ侯に用心しろ。○もう己を去なせい。○澤山だ。

(幻像消え失す。)

マクベス王

ふん。お主は何者か知らぬが、己に氣を付けてくれた禮を言ふぞよ。

お主は己の心配の圖星に言ひ中てた。ちやがもうたつた一言。ひやくいちご

第一の魔女

あれは人の指圖なんか聞きません。それ、外のが出ます。  
さつきのよりはえらいのが。

(雷鳴。血まぶれの小兒の幻像現る。)

幻像

マクベス。マクベス。マクベス。

マクベス王

おう。耳が三つあつても好いと思つて聞いてゐるぞ。

幻像

血腥く、大膽に、思ひ切つてお遣なさい。人間の力なぞは  
馬鹿にして笑つてお遣なさい。女子の腰から生れた男に  
マクベスを惱ますものはない。(消え失す。)

マクベス王

マクベス



ふん。そんなら生きてゐろ、マクダツフ奴。お主を恐れいでも好い筈だ。だが己は安全の上にも安全を謀つて、

運命の質を取つて置く。お主は生かしては置かぬぞ。

その上で己はあの臆病な、蒼ざめた「心配」と云ふ奴に、貴様、

嘘を衝くなと云うて置いて、雷が鳴つても寐てゐて遣る。○あれはなんぢや。

(雷鳴。木の枝を手にしたる、冠を戴ける小兒の幻像現る。)

こん度出たのは帝王の子孫でもありさうだな。

幼い眉の上に、最上權の冠と

頂いたゞきを載せてゐるな。

一同

物を言はずに、聞かしやりませ。

幻像

獅子の氣象で、大膽にお遣なさい。誰が擲な擲つても、

衝つつ衝ついても、ごに謀叛人があつてもお構なざるな。

あのバアナムの大きな森が動き出して、

ダンシネエンの高い岡へ寄せて來るまで、

マクベスは人に負けませぬ。

(消え失す。)

マクベス王

そんな事は永遠にあるまい。

誰が森を動かすことが出来るものか。土にからだ根を

抜け出させるやうに、誰が木に指圖することが出来るものか。

うれしい識し緯けいぢや。好いわ。バアナムの森が動き出すまで、

叛逆の頭あたまは決して上がらぬ。王位を踐んだマクベスは

マクベス



天然の壽を全うする。老死の目が来るまでは  
落ち着いて息をしてゐる。だがここに一つ聞き残した事があるので、  
己はまだ動悸をさせてゐる。(お前方の術で  
それも聞せて貰はれるなら) どうぞ己に言つてくれ。あのバンコオの子孫が  
此國の王になることがあるだらうか。

一同

もう先は聞かしやりますな。

マクベス王

己はごうでも足んのうしたい。それを己に隠すなら、  
お前方は永遠に咀はれてをれ。是非己に知らせてくれい。  
や。あの釜はなせめり込むのぢや。あれはなんの物音ぢや。

(高調木笛)

第一の魔女

お出よ。

第二の魔女

お出よ。

第三の魔女

お出よ。

一同

目に見せ、心を惱ませに、  
影の様に來て、すぐお消

(八人の王現れ、列をなして前を過ぐ。最尾の一人は  
手に鏡を把れり。バンコオこれに尾して行く。)

マクベス王

マクベス



や。貴様は餘りバンコオが幽霊に似てゐる。さがれ。  
あの冠が己の目玉を焼きさうだ。○貴様の髪はごうだ。  
今一人の金冠を戴いた面奴。貴様も初のに似てゐるな。  
三人目も二人目に似てゐるな。○怪しからん魔女奴。  
なんで己にこんな物を見せるのだ。○や。四人目が。○睨みやあがれ、  
目玉奴。○こりやごうちや。最後の審判の鼓が鳴る迄、行列は續くのか。○  
まだ別の奴が。○七人目か。○己はもう見たうない。○  
まだ八人目が出をる。手に鏡を持つてゐて、  
跡を澤山己に見せをる。中には  
寶の玉を二つ持つたり、令の杖を三本持つたりしたのが見える。  
恐ろしい幻ちや。○や。これで分かつた。本當ちや。  
血みぎれのバンコオ奴が己に笑顔を見せて、

前に行く奴等に指ざしをしてをる。○ごうちや。さうしたわけか。

第一の魔女

え、御前。全くさうよ。

だがなせマクベスともあるお方がそんなに呆れて立つてゐなさるの。○  
さあ、みんなお出。あの人の氣を霧らして上げようね。  
わたし魔法でここのらに風の風に好い音をさせて遣るわ。  
お前さん達は古風な踊の輪をお作。  
わたし達の義理で、おもてなしをして上げたど、  
そこの王様がお思なさるやうにね。

(奏樂。魔女等舞ふ。次いで消え失す。)

マクベス王

あいつ等はどこへ往つた。往つてしまつたな。ああ。けふの厭な日は



永遠に咀はれて曆に残るが好い。○  
外まきにゐるのは誰か。這入まつて來られい。

(レノツクス登場。)

レノツクス

何か御用が。

マクベス王

怪しい女子供を見はせられなんだか。

レノツクス

いえ。何も。

マクベス王

その前を通つて往きはせなんだか。

レノツクス

いえ。全くそんなものは。

マクベス王

ああ。あれ等の乗つて行く風は毒の息いきになるが好い。

あれ等にたよる人間は皆咀はれてをれ。○

己おのれには馬の驅歩かけあしの音おとが聞えたが、來たのは誰か。

レノツクス

あの二三騎はマクダツフがイングラントへ逃げた事を  
知らせに參つたのでございます。

マクベス王

なに。イングラントへ逃げた。

レノツクス

さやうでございます。

マクベス



マクベス王

「時」奴。貴様は己の恐ろしい爲事の先潜さきぐりをしをるな。逃げた企にはどうしても追ひ附かれぬ。

爲事が附いて行かんで駄目だ。これからはたくらむ胸の初子はつこをその儘

爲遂げる手の初子にして遣る。さて取り敢ず隠れた思想に、

あらはな事業の冠を被せて遣る手始に、（おう、あれを思つてすぐ爲てくれう。）

あのマクダツフの城に不意撃を食はせて遣らう。

ファイフの城を乗り取る。あれが妻や、あれが子供や、

その外血筋の絲を引く一切の不運な芽蘖めはえを

刀の刃はに掛けて遣る。これはたはけのするやうな廣言では無い。

企の熱が冷めぬ間に、此爲事はしてしまはう。

ああ。もう怪しい物などは見まい。○使者共はごここにある。  
さあ、己をそつちへ連れて往つてくれられい。（退場。）

第二場 ファイフ。マクダツフが城の間。

マクダツフ夫人、其伴、ロス登場。

マクダツフ夫人

まあ、主人が何をいたして、逃げることになりましたのでございませう。

ロス

まあ、奥さん、我慢して聞いて下さいまし。

マクダツフ夫人

マクベス



いゝえ。その我慢が

主人には無かつたのでございますね。逃げるなんて、物狂はしい。悪事はしないで、臆病が不義者にいたしますわね。

□ ス

いや。

先見でせられたか、臆病か、今はお分かりになりませぬ。

マクダツフ夫人

先見でございますつて。妻や子を棄て、家を棄て、位を棄てて、

この土地を自分丈逃げるなんて。わたくし共を可哀いとは

思はないのでございます。生物に皆ある情が夫に丈はございません。鳥の中で一番小さい、あの不便な鶴鷄でも、

巢にをる雛を取らせまいと、鳥と戦ひます。

何もかも臆病でございます。愛情がちつともございません。

こんなわけの無い駈落をいたすやうでは、

先見がなんになりませう。

□ ス

いや。奥さん。

どうぞ我慢して、そんな事を仰やらないで下さい。こちらの御主人ですが、あれは高尚な、賢い、しつかりした方で、「時代」と云ふ奴のきまぐれを好く知つてゐられます。わたくしもこれ以上お話しはいたしにくい。

實に今はひどい時です。我々は謀叛人、不義者ださうで、

その癖自分には自分が分かりませぬ。我々は何事をか懼れて、

流言に膽を冷やしてゐます。その癖何を懼れるのだから分かりませぬ。

マクダツフ



只波風の荒い海の上にあちこち

漂つてゐるのでございます、いや、もうお暇いたしませう。

尤も遠からず又お尋いたす積ではございますが。

何か物事がまづくなつて來ると、下がる所迄下がつて止まるか、

さうでなければ元もとあつた高さに戻るかよりありません。○可哀い若さん。

御機嫌好う。

マクダツフ夫人

お父様はごここにお出いでなされても、もう今から孤ひとりでございますのね。

ロス

いや、わたくしは馬鹿です。此上長居をしますと、

わたくしはいく地なしの恥曝はらをして、あなたも御機嫌を悪くなさいます。

もうお暇いたします。

(退場)

マクダツフ夫人

坊や、お前のお父様がお亡くなりなすつたの。

お前まへどうするの。どうして暮らすの。

伴

あの、わたし鳥のやうにしてゐますの。

マクダツフ夫人

蛆や蠅を食べるの。

伴

なんでもあつた物を食べますの。鳥なんぞはさうだわ。

マクダツフ夫人

鳥は可哀さうね。網あみだの竊竿ひそかだの

マクダツフ夫人



竈おとしだの絹わなだのはこはなくなつて。

倅

こはいもんですか。小さい鳥には誰もそんな物はしかけないわ。お父う様は亡くなりはいしないわ。お母あ様がなんと云つたつて。

マクダツフ夫人

いゝえ。お亡くなりなすつたの。お父う様をどこから連れて來ようね。

倅

さうね。お母あ様は檀那様をどこから連れて來るの。

マクダツフ夫人

それは、お前、ごこの市へでも往つて十も二十も買つて來るわ。

倅

ではお母あ様、買つて來て又賣るのでせう。

マクダツフ夫人

まあ、お前有る丈の智慧を出すのね。だが、ほんにもう智慧が大ぶ附いてゐることね。

倅

お母あ様。あの、お父う様は不義者なの。

マクダツフ夫人

ああ。さうですよ。

倅

不義者つてどんなもの。

マクダツフ夫人

さうね。人に約束をして置いて、嘘を衝くの。

倅

マクダツフ夫人



それをするに皆不義者なの。

マクダツフ夫人

誰だつてそれをすれば不義者さ。だから絞め殺されるの。

倅

そんなら約束をして置いて嘘を衝けば、皆絞め殺されるの。

マクダツフ夫人

皆絞め殺されますとも。

倅

誰が絞め殺すの。

マクダツフ夫人

それかい。それは正直な人がするのさ。

倅

だつてさうだと、絞め殺される嘘衝は馬鹿だわ。約束をして置いて嘘を衝く人で、正直な人を打つたり絞め殺したりするのが澤山あるのですもの。

マクダツフ夫人

まあ、どうにもしやうのない子だこと。困つたお猿さんだね。それはさうとお父う様はごここから連れて来ようね。

倅

さうね。ほんごにお父う様が亡くなつたのだと、お母あ様が泣くわ。それで泣かなけりやあ、好い事があるのだけわ。わたしきつとすぐに新しいお父う様が出来るとだけわ。

マクダツフ夫人

まあ、お饒舌しやべりだこと。好くいろんな事を。

(使登場)

使

マクダツフ夫人